

清暇錄

大正十年第一月起業

二

特別
14
1919
333



清曉錄二

大正十年一月起筆



每身元旦机上一印之美一之文姬之试也之



余り近年の恒例なり、ことし七三四十の年をこま
 印を捺し、又り、多量なを修め、こんやうな印
 刷業者の始業式も見るべし。鳥の印も近年
 の干支をあふす。此印は敬淑の秋章印刺
 二載を注し、洋印と云ふ。往年半に換
 刺せしめしもの、今年始めて用を為す。物
 産の印も蘭八の刻に係り

大正辛酉十年元日記

○舊職余の書案を以て著録に併せしめ石塚の撰記
言を以て衣に収む。

○海軍在職より七山形の元々七の二十二(圖)を並大帳に書
し、目次たの如し

- | | | |
|-----------|-------------|---------|
| 一 記不知 | 一 糠波 | 一 小山田玉巻 |
| 一 糸魚川 | 一 小千谷雪雲 | 一 七花地秋錦 |
| 一 月不見池 | 一 七全奇勝 | 一 越前山崎雪 |
| 一 結壺 | (以上一帖) | 一 加治川梅雪 |
| 一 白蓮山望の馬山 | 一 八木絶壁 | 一 母川漁村 |
| 一 如高遠望 | 一 珠秀及佐川 | 一 倉珠閣 |
| 一 苗羽瀑 | 一 獅子岩(海濱集二) | 一 天草嶋岩 |
| 一 白御津湾望米山 | 一 白麻(浦濱集二) | (以上一帖) |

○海内各地を巡りて海のそとに民衆藝術の創りたる
一處を示さる、米田所著の *Paganism & Paganism by Botts*
+ *art*、こゝからあるある、思ふ

首部二頁にうらむと後、民衆共同一に併せしめたる
に歌も記す歌の式や、まゝ歴史の懐舊の事一氣に
歌の材料たる取らぬものあることを知り得たり、思ふに
地方々々、そんくの歴史の材料あり、そんをえり
以てんが歌を伝へ、多量の人情の歌を伝へ、そんを
皆北の其のそにかつることの出来の致向するんが、今後の
時勢に應ずる、デモクラティックの歌を漸くえんるんが、
適宜なり、ことし早稲田大学創立四十年の記念會場にて
九七試みんとするの意義あり、余は大隈氏の書録中

何と材料とよりきやると伺ひる。余も築地の梁山崎の
代の侯をあらうし得ぬこととありて知るものも実を細
る得る。亦此侯の服装を記しを測りんはるるをみて
時代を黄い丈の衣被を着け黒いろうどの長羽
織を着せりと侯の真流をとも後う出てどう道通
を伊豆のバジエントを心んと考ふ案中、くくく
伊勢の丸印、う海船、え過つておるをえらん
ど胸の関ハ海を物めりてえんとある能くせしと
吟しはる漢語を。パロセントと入んてしとありて
胸中の秘を解らぬくしと。又丸海の風通る
の節ハ丸海とパロセントを催すものなりとせし
をあらふ乃ち左の秘するものも通るがとおるん

自序の好ま

○本年の首端に何人と候もお期を承りし
年の一後しとありて実業の志を
節、指けた、堪回ウイナナ、その本は
子孫完断もスターナハ氏の回表法を
永井勝造氏が平易に伝へしと一編は
く、不謂く荒るう法とあり長文か
である、従来ハ人先んか恐るる生
の働もも減退するも、生
減退の全く老衰の要因を
種々の実験より容易に生
し得ることなるもの、人生の一大福言ハ是

双柳香うたかた
 柳が命をなま
 さらすす
 才遣をさいし
 は梅柳うめりう
 といふい
 けりけ
 訂正ていせい
 大だい
 柳に閑りゅうにかん
 俳句はい句

のあはれの茶のちり袋は
 柳の句を月八朔のちき散らしし者
 かくけりつけあふ。此の別荘の庭に
 て風政を誇く主人は梅柳を以つて
 名を日つけ

ある時ハ朔の句を微し、そこそ
 ありとゆゑんさう、閑は梅を讀
 みる令の句をき
 のありさうのゆゑを物さす

脇に秋のしめたる熟柿、うさ 支考

戸隠山のやとさ

流柿よりいひゆるるや猿の啼く白旗
 卯酉柿は秋まはるのあま山子乳 甘露村
 物あんに時めく柿の楮うさ 菅太

い
して
なり

産みしむて秋のしきも 蒸柿の 夢うた

臨柿や廿々の歌も 換のこし 日上

柿の木をあのとききくも 修好 一茶

あしや柿くひらき 改の上 惟虎

一柿の今も昔行く物なる 二柳

○道邊を西洋へ行く 傑物人形並に其の沿革
等と記しと云と示す

A Book of Marianella by Helen
Hainway Joseph.

傑物とマリヤ子ウト或るハツバウトとも云ふ 古来世界

各町の期を引しと云あるのめし、此の由中一と日
七見えたり、道邊の海に接及する、割たり、唯此マリ
ヤ子ウトあるのみと後より、彼んらふき文化の種
書所に演劇無りしと云ふこと平らむ也、

○道邊五十嵐力と者同をとりんとし、米地を現
めたりと云ふ、あんの者地を沙翁の生年と同一
即ち一五六四なり、此の数字が偶と一五六四
とも讀めりとのことと笑ふ、五十嵐姓の人の印に此
の数字を用ふるも可きこと似たり

○道邊より別荘在値と云ふ有り別荘をある人々
と特別なる高價に物を賣る風あり、ある店に別荘
を賣る人々賣り物を焼いんと云ふ人偶し、商人

不花も年少の晩あり、物り價を問ひんせ、亦供り高
勢よりおつらさん此物の別荘候りいくらと問ふに
と云ふ話あり一ツ天志し、路傍に兒あり錢を拾
ふ、亦錢ありと云ふを以つて辭けんと言ふに、亦錢を拾
ぬ、亦釣錢をあげたまると云ふの答く言ふ亦執海
のり也一變の天法こ

○飯沼の梅子の後ろの山上に紫雲四朗ありお地あ
り山林七所あり、三千数年前余の紫雲を訪候なる
頃より樹も木も生をり、家も僅く、容膝して坐るに
いこのやうし、此の山を十数年前由こ是印
一トと云ふに、梅園に別りんば、此の山の上
紅白煉瓦の洋館の高く、四眼界り入る来りあり、

是は誰れの家と問ふば紫雲の初子の宅なりと云
紫雲も舊地を去りて之を築めり、紫雲も
一或年と云ふと云ふ、此の山の眼前に本舎と
設けたり、亦紫雲の住居なり、こゝを本舎といふと
を置るためと云ふ、亦遠く紫雲の成を言ふ、
飛沫を言ふ、此の山を、此の山、紫雲舎と
設けたり、前年、此の山、紫雲舎と
あり、此地あり、若し余の年、紫雲舎と
前を置る、紫雲舎と云ふ、紫雲舎と
あり、此地あり、若し余の年、紫雲舎と

○今、此の山、紫雲舎と云ふ、紫雲舎と
あり、此地あり、若し余の年、紫雲舎と

あう

法隆寺うた

ちとせあまのうたみはひめくろくも七とせと

ひとひのゆくまを寺か

おしあくる重き扉のあひれ

げや見え玉のあひはるけの顔

中宮寺如嘉輪観音をおし

みろをけのあひと胎とにあまてら

小崎さあねのいあうをぞみ

大あまのけう

海かまう行けは鳥居の敷につく

兔の耳は木枯のうた

後に
ひらくと
ゆむ

三日月
あまの
大らり
ゆむ

一首無心を載のうたう

みとらりの様の真つるはけ

ひきをあつらぬいにくあは

八朔を一茶と私淑す、初路も六真率、正業の

あいに味あり

○喜多院の職人共廿四枚を造りつけたる扇風を四
寶の撰りまひ入るる名ものむあつらひ、近年、撰取
を心りたるが、つらうの出来うた、自今、あつらひ、
めて其の一遊を、お認めを得たり、此の職人、おしと普
通、あつらひもの、あつらひ、お認め、あつらひ、
業の勤心をあつらひ、お認め、あつらひ、お認め、
を名精細に描き、風俗上に巻く、あつらひ、あつらひ、

んんん、^{心月庵}心月庵をいふ。こゝに心月庵といふものがある
り似たりと云ふは、何れも一葉^{ひざり}、遺墨^{いせき}を
物書後拾^{しり}（三才目の一字も本著しおもしろ
い字面をいふ、その顔をもつて）換^かりて
るものといふ。良言なり。心月の名傍るんば、その字
もまことによきと云ふ。おもしろい。

○沙翁らつまつまゝの役者としてある文章、其の名も括
て不朽の名著を出し、そのまゝとて英也其作の考証家、
こゝに志がく論じ、いふやうに或る実体をベーコン
とあり或るウオーター、ラレーの姫^おの何某とあるをい
文その界の好む家にあかく研究の結果をいふ
おもしろき説柄と云ふ。是のことなり。実り沙翁の経歴

この種々野あへき経歴あり、実如彼なりぬき大天才が
田舎役者として先づも終つてと云ふ疑はんも、其
の四十或五の後に田舎に引込めて後一冊を出し、こゝ
常つて五人も交はり、形跡なきも終つて、或る
ベン、ジョソソソが彼に、遠退後、いふことあるをい
ふ。是れ未だき彼のあひも、沙翁の子孫に遺書を分
つ遺す状、種々の賦書と名付けらるゝ一語の著し権
に及ぶこと、皆沙翁の傳へたる。其の著し権
心者と別人があることを疑つて、いふこと、さるるを
ベーコン説をいふ。起りたる書、こゝに偶々、海ありと云
しと云ふ。いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
考証家をいふ、其のいふこと、いふ、いふ、いふ、いふ、

の名七龍騰をきんじ、此著者たるこゝまかの考証家とて
今も別人物を撰んで得た、河原に托して又其友を即
ち其人とせんと二十餘ヶ条の考証を其の表しとす
その人物とてラウツスフォードの伯爵某とす、此人を
二十四五才とみ算るゝ云々あり、其の作りたるソニ子
との残りも亦も亦、然るに二十四五才以後更にもや
こゝろにや、そのや、こゝろにや、死したる、
とす、此人を四十九の年とみ算るゝ云々あり、
あり、或るに河原の後ろに院を築き、不朽の花を
たぐふ、あり、所謂河原の庭と云ひて、
子つとを思ふ、此の伯爵が為りて世に出したるソニ子
と甚だ執を固め、不あり、こゝろにや、一途とす、と云ふ

考証を二十ヶ条に羅列し、
而してハムレットの脚をのめ、伯爵自身の経歴を暗
に托して叙する、あると云ふ、彼人の考証
を讀めば、その多き、思ふ、精細、
その、其著者の、
其作とす、こゝろにや、
年、此伯爵既に歿せし、
考とテム、ペストと云ふ、
其、此の著者、
きりと云ふ

の、酒、
長、

目録にさし、橋々を多く築き今も修造するもの
ある所のほかにある、吸氣の前の大樟樹も此岸
の風に折れて今も極めて鋭角の形となり、その
いし、ほかに舊長尾の河原も風致を添くるとい
をこざと植えてあり、そのまを皆流して今も
何も無くありてある、唯此の風おまのいかに種々の
を破壊し、こゝをいかに、城道市役の、平内行
るのいかに、南の丘陵を築け、山を列せ、或は塘堤
を築き、或は河川の流も、西の方角を築し、今も
ある、殊に此等のいかに、風致を築し、今も、
の名主お某の家のおいかに、こゝを材料運搬
用と塘堤を高く築く、城道を修築し、今も、

谷の家の前は道を隔て竹林のあり、此のいかに、
もろくありては舞い、お谷の家の石垣と一程、
そのいかに、斜る石段を上りて家に入る、
つねのいかに、古殿の形をこゝて今も、
此、自分も、此のいかに、村を放棄する、
名主の家の前は、来る、杖を駐めて、
剛志、このいかに、幽遠な村道、
那め、いかに、楕根や、
を、賞既し、いかに、
地を、北村、
たのいかに、
て、自分も、

道の北の鐵道工事とあまのの大工子雜工事ひつら梅
つ道北の山を穿つて合力を注いで居る。此の墜道するは
いつ後つちのむあう、穿つとあまの奥に入るも多量の石
が出て来て難する。一層の雜を加くと再びと穿へてお
ふ、さうして前途三ヶ年七経過せよんは全通とらうと
決心する。海岸の材料と陸揚げする方の、鐵道
の海にすか、海にひるのを見れば、海濱ひあるは、
早あまのを揚げらうと、此等、骨の折れるさうな海
岸の波濤と防衛する石の工事の暇なき、即ち、
及、始めの石のむあう、こころなえん町のあまを、
つことも出来るも、おんぬら、悲劇の面目を、
く度して、風物のも、無くさうは、種々の物と

高の家、主言つて、見ると婦人の化粧もや、其の他、
等、必、冬、の、以、え、ん、供、後、する、品、物、を、東、東、の、銀、座、の、
洋、毛、に、後、ん、を、取、ら、ぬ、扱、あ、ま、の、か、い、く、も、改、列、を、
みる、熱、海、を、月、々、り、の、都、合、に、し、つ、て、あ、う、ま、ん、文、自、分、
と、不、快、を、感、じ、し、の、ち、も、こ、ん、ら、う、ら、熱、海、を、
眼界を映する、見、星、を、不、感、の、一、組、ひ、あ、う、(道、途、の、
り、熱、海、と、五、十、名、家、と、ま、あ、冊、子、を、終、え、ん、は、こ、ん、ら、
道、途、の、熱、海、に、遠、境、海、を、靴、つ、て、あ、う、北、方、も、な、ら、ぬ、
め、て、平、ら、さ、う、も、の、ん、あ、う、さ、う、さ、う、の、ま、ら、こ、こ、こ、ま、あ、う、
置、き、く、

○熱海の旅客に於ける見ぬ時々の新報を、
見ると、例の、高、橋、常、居、の、奉、居、に、ら、靴、つ、て、あ、う、

七字
のし

日曜(大) THE HOKUETSU SHIMPO 日四

も又著しいのである。故に教育の方針が鋭良であれば、好い結果を生ずることは勿論である。予は歐洲戰亂の當に對せんとする一週前、獨逸の首都ベルリンに遊んだが、當時獨逸に於ける教育が、如何に充實して徹底するか認められた。由來獨逸國民は節約的特性を有し、一般に學を好み、而して之を研究應用せしむとする、所謂向上進歩の熱心を持つ國民であるが、點に對し當局は軍國主義の盛んな結果、徹底的軍事思想の普及演義に努めたので、富國強兵の實を擧げることが出来たのである。併し獨逸國民は、極度にゴツド、チョウズン、ビーブル乃ち選民思想を抱き、國家を神聖として國家の名の下に團結し活動せよと云ふ教育を施したのである。即ちカイゼーの神話中にも、一度獨逸人が手を擧げれば、何事か成らざらんや云つて居るが、軍國主義に依る選民思想を、國民に灌輸する教育方針は、甚だ諷つて居るものであることは、這般の大戦

無きもの、うしろの風わきま



断片と云ふ迄のゆゆ半
端の或中より亡友山田君
の家の事と及んべ
ぬ、彼の、家も居る
の数字もあつたと云
へる。
○自分の五毫論と此紙の
報の初刊、載る来比
うらみんせ、い、ぬ、ぬ
大正十年一月七日の録

大正茶道記
小柴庵口切三
志野茶碗の産地は、山形州
の鶴巻で、藤紙に同人等て左の
歌が附けられてある。
山里の卯の花かきのなかつち
きふみわけし心地こそすれ
深い筒茶碗、無縁口切時節の道
であるが、今日は先般降つた雪
初雪が猶ほ雪地の垣根に消え残つ
居るので、卯の花ならぬ雪の
踏み分くる余等に一段の風情を感
ぜしめたのである。口作は厚薄不
均雅致に筒茶碗の上の方に、黒
れた筆作があつて白濁の中に
細く、一、二、三、の如き、草の葉
は、れ、高、を、夾、んで、例、の、煙、草、の、葉
形に白粉を塗りたるが如き細かさ
白土を見せ高臺は低く、縁々に白
き筆作があるが、何れも力強く作行
でヒョットしたら光悦作ではある
まいかと思はる、やうである。此茶
碗は昔江戸深川の豪商冬木平次
の家にあつたが、或る時大坂の
山田某の云ふ數寄者が是れ此茶碗
を求めたいと云ふので、冬木は自ら

これを大阪まで持参した。其後
段が當時千兩と云ふので、流石の山
田も真取り終て一時誤判不調と爲
り多不は此茶碗を携へて大津まで
引越したる。山田は茶碗戀しきに
居ても立つても離れられず、縁に
かけて大津にて追付の力餅の
茶店に立寄りて名物餅を喰ながら
此茶碗にて薄茶一杯を呑む間に、
頭談判を續めて茶碗は首尾よく
田の手に入つたさうである。此
田は彼の政治家で山田君の助成を
蒙りて云つた人の父が若くは祖父
であらうと云ふ事である。本誌
茶碗には赤味の勝つた者も鼠色の
勝つた者もあるが、純白に比すれば
暗味が下るやうである。余は近頃
無地志野茶碗を拜見したが、是れは
古來有名な善て品格高く、純實は
卯の花に類して居る。而して卯
の花は大阪で山田氏所蔵の中、地
方に於ける志野三茶碗の首位を占
めたさうである。から志野茶碗に於
ては是れがHの下開山であらうと
思はる、斯くて濃茶一巡するや、廣
間へさの案内があつたので、小間
へ飛石俣に母屋の方に附屬する
六疊廣間に打通りは床には遠州表
具さ、鏡しき雲舟、茶土の一軸が掛
つて、基下には時代、黒三足卓には
次郎作寄口小香爐を飾られた。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

自分の五毛拾十紙幣

大正十年一月七日録

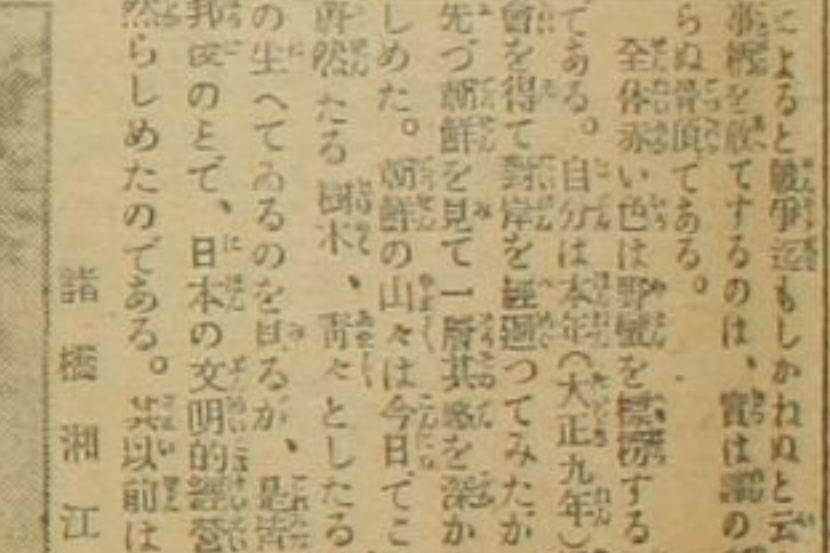
山田宗之助... 大正十年一月七日録

12 山田宗之助

五色の問題



市島春城先生の... 五色の問題



諸橋湘江翁筆

五色の問題 (continued text)

五色の問題 (main text, top section)



諸橋湘江翁筆

五色の問題 (main text, bottom section)



諸橋湘江翁筆

五色の問題 (main text, bottom section)

五色の問題 (main text, top section)



諸橋湘江翁筆

五色の問題 (main text, bottom section)

断片のついでにのち七半



第一頁上川人輯
二 郎九崎山人
行 所
日丁二町上ノ坂
社 報 新 越

教育

教育の根本的改造
速に政治教育を實施せよ



貴族院議員早稻田大學
名譽校長法學博士
高田 早苗氏談

獨逸の選民思想

教育が常に社會に及ぼす効果は表面に於ては極めて純い様にあらはれるが、事實は頗る複雑にあらはれる。中流階級以上に實行されて居るが、是とて受動的な教育に過ぎず、教育の方針が國家の興亡に重大なる影響を及ぼすのである。

日本の選挙思想

選挙の思想は、國家の運命に重大なる影響を及ぼすものである。日本は、選挙の思想が、國家の運命に重大なる影響を及ぼすのである。

議會と教育の關係

昨年突如せる尼部氏の責任問題の無きは、折衝開會中の臨時議會に於て可なり列しく論議されたが、遂に大臣「臣節を全うす」と云ふ一片の辭令を以て、殆ど曖昧に糊塗し去られた。その教育上に及ぼした影響は、實に甚大なものがある。臣節云々の意味は、宮中に於ける君臣の關係を外ならず、夫々貴族院の貴族院の老人達が、何れも國務大臣の責任ある辨明と解釋したは、寧ろ當然の事とは謂へ、愛慮に堪へらざることである。一休、議會に於て議員は、議會を擁護せねばならぬものであるが、今日の當務中には、甚だ此點を即ち議會を理解するの力のないものが多い。議會に於ける諸問題の如きは、國民教育上一致の點を以て、國民教育の急要である。

急要

由來我邦現の教育方針は、全教

大正十一年十一月五日(第三五五三號郵便物認可)

七字後ハ
ハハ

○今宵ハ解衣らえ物の旅歌浪義とて我が
しるも尚ほ一紙しるも前二録しるも
有後又若干一首を寄せませう

法隆寺より

以ち出るともろと閑たは金巻の
三條の音をいつう忘れぬ

法輪寺より

観音のしるも忍に環路の影
うこころも風わさるる

五字
後に改
む

宝瓶のはちまのころ 褪せ色の
縁ふきそ木杭のふ

海部寺玉

しくれの海部いなくる改まりそまの
柱の古木 聖なる流れむ
ある寺の柱にこる 麓の名をよみ

ゆけとーくろく

麓の名をよみ 聖なる
と改まり 海部寺

海部寺の木杭の役行名の

新編
新の
新の
新の

扇を揺る

あーひきの山のはちまの
つらに似る 尻のまこひげ

法を弄するも十一面観音をおす

親者のおまけはけりも無んこ
とてうにせまる 麓のこり

新編
新の
新の
新の

○時代政教社発行日本及日本人に對する柳の
初巻の評論を後にて海部の風味をそよぶ者
者名海部在工門を此僧の研究者と見えん
言ふ不談雷をそよぶ 珠に瑞方面山の甚く

枕おのり傳抄を全部刻し七附載し以て之を多し
 するに、此方より珍をこ、瑞方面山を枕おのり孫亦よと
 七兄よへき人よを枕おのり傳と此方よと多くあしく、
 確と考きしるをあらう一枚あり、圓あり上款に漢を
 の賛あり、卷尾に寛延二年七月十九日謹記とあり、
 又の如五年戊子仲冬五日肥谷雲龍山清澤禪寺
 為股とあり、此の股本とあり七坊あり無き七のうめ
 此の附載の流字を七引離し七卷をこかく七保存
 すとす

大正十年二月六日

○毎年、年首に印刷舎此の職人を合し七新年のあは
 すとす、例に七恒例に七梅月一令を催し
 比、余と社長と七席上、一場の演説を試む、まこと

のは年氣のふる、漲る席上片くく、い川示演説
 七其、日を去るこく、とそを別とそま七出壇に起
 七知例の出題目、然、西、後、交、の、演、説、を、試、み、一
 同の好笑を誘ふに、大なる

七、自、己、の、年、目、を、自、己、の、歳、や、四、の、紀、元、也
 七、中、古、の、年、の、干、支、を、い、ふ、氣、が、つ、く、自、己、と、時
 七、年、衆、曆、六、十、一、七、子、供、を、な、つ、に、即、ち、本、年
 七、改、進、の、才、二、年、目、を、あ、ら、う、こ、と、し、七、辛、酉、の、年
 七、七、地、歳、と、古、来、革、命、の、歳、と、云、り、れ、る、
 七、下、が、神、武、天、皇、の、紀、元、と、同、じ、干、支、に、あ、る、
 七、革、命、は、よ、い、こ、と、な、る、
 七、併、し、何、ん、こ、し、も、國、家、の、大、変、を、表、味、す、
 七、

芳しう此の歳を四り今を朝野をなすは
謹慎する程がある。どうも世界のあり様を
の状況を見るも、何となく憂鬱がある。さう
な気がする。金銀酒と云ふ物も嗜むこと
役目、其の天的を殺すこと人の懶惰を
破り人を教養するものもある。辛と云ふ字
を虎辛のうらしい、うらむ、つらむと云
ふ意味がある。あるある思苦のことと俗
に辛抱と云ふ。良のつらむことを思ふと
云ふのひあう。辛酉の干支ハ晴る裏は
吾人に向つて思苦を教養醒して居る。お互
ひも本年此の暗示と服膺せねばならぬ。

今年七十年と云ふのは、順境がある。この
の事業が不景気ある。昔んば、今年を始り
この景気の荒味を多けさう。これ係し
本年と一層不景気が濃厚なる。とも
云ふてみる。本年を佳しと云ふ労働革命の
的来期もさうして時間短縮を実行を物心
ある。今年運命の回轉の時今年も
さう自然の暗示に従つて市町村を改革す
らう。一層努力を以て祈る。女と思ふ。努力さ
せん。酉の年ハ取り込め年ハある。此年ハ中
年の利益のあるも内々思ふ。花屋の努力
かむ。之れを癖くること。出来れば本年去る

年々努力を以てし、い結果ありあ
 西年と名を更へてあつて、保し平の一言を忘
 れたるを、幸抱と要するのを本年はあ
 り、坪内(名)海士の海を以て無(い)自(ら)と
 此年六一(い)無(い)の年にあつた、本年を
 六十二(い)あ、来年を六十三(い)無(い)とある。
 無(い)三(い)比(い)努力を要するのを本年くして
 あり、^か自(ら)比(い)努力を以てし、共(い)自
 己年一の洞(い)め、^か自(ら)比(い)努力を以てし、
 己年の他(い)原(い)を祝し
 ませり

一月廿二日

○新年、如(い)市(い)中(い)教(い)業(い)同(い)友(い)漁(い)書(い)の
 才(い)一(い)也(い)、得(い)る(い)意(い)味(い)は(い)一(い)乃(い)ち(い)清(い)田(い)君(い)錦(い)の(い)蘇(い)我(い)
 湯(い)蘇(い)我(い)漢(い)の(い)二(い)冊(い)、この(い)み、此(い)二(い)冊(い)の(い)刊(い)行(い)
 係(い)り、持(い)法(い)を(い)交(い)へ、^か自(ら)比(い)努力を以てし、
 著(い)者(い)の(い)仲(い)見(い)江(い)村(い)北(い)海(い)の(い)日(い)文(い)の(い)為(い)あり、坊(い)習(い)
 此(い)者(い)を(い)稀(い)に(い)見(い)る(い)に(い)せ、二(い)冊(い)揃(い)ひ(い)あり、^か自(ら)比(い)努力を以てし、
 此(い)日(い)の(い)夜(い)後(い)枕(い)に(い)赤(い)毛(い)の(い)郵(い)筒(い)を(い)来(い)る(い)中(い)川(い)柳(い)外(い)毅(い)息(い)
 捨(い)す(い)に(い)一(い)寸(い)二(い)三(い)分(い)許(い)の(い)小(い)巻(い)あり、^か自(ら)比(い)努力を以てし、
 の(い)上(い)絶(い)ち(い)教(い)首(い)を(い)収(い)め(い)る(い)に(い)即(い)ち(い)著(い)者(い)の(い)意(い)味(い)を(い)傳(い)へ
 る、^か自(ら)比(い)努力を以てし、
 印(い)し、^か自(ら)比(い)努力を以てし、
 寸(い)冊(い)寸(い)帖(い)と(い)蒐(い)集(い)し(い)末(い)に(い)一(い)七(い)此(い)行(い)の(い)由(い)を(い)刊

又此ことあり、殊の印簿三種ありとせり、余既に二種を
為す、これ或る三種中の一なる莫くもや、即ち簡して
在るを問ふ、知る者存するや、任書に疾定あり、或
と既に走りや、一冊を任ば報を得ん、
○此秋牛込の梅月、この印簿分社の大得意先名
見ふべき、再石川武美、お丑六名を摺分社より
振付す、此の石川と「主婦之友」と云ふ婦人雑誌
の社名も他の丑六名と其の雑誌流の雑誌部也
此の雑誌を二年前に余此の印刷を引受け、
時々二番、このまきとせり、一年おのり、二十巻を
突破す、利り増ゆる増田義、Qの婦人雑誌の
塾を度々、ある、ある、この酒場と云ふへし、

石川と云ふもの、前一二婦人雑誌の記あり、
歴あり、終に自家姓名を志す、あり、此成印あり、本
↑此、此人主婦と及の記あり、此に経営家、
二種を分けば、成印の偶然、
こゝ、漢字を校正するも、自らするも、多ん、三校するも、
七、紙型も及び一字の誤植も、見えて、
、於ても彼自身も、執着し、
し、雑多さ、ある、ある、
寄稿雑誌の、
必、
の、
取、

是のものは心之れを取ら、但し自信なきことと決して取
らざらば、余を以て根底とするに在りて、自信なき
まを、試験を以て初め之れを、後あるは、材料法
を以て、全圖何れの地に、柱を以て得るべき材料、これ
のみ、その神理を説く、一え、其の考ら口の一端あり、彼
れを以て、氣板のことを、丈夫と讀む者、と云ふは、
とあるが、多別と、能くあり、自分の雑徳の本領と
するに、これあるは、自分の考ら口の、地味本位ありと云
ふを、居る、係し、實際を考らう、と、考らう、眼新らしく、考
らう、他の雑徳、これ先人し、新に考らう、題を掲げ、彼れを以
て、考らう、地味一方を、固守する、と、考らう、考らう、係
し、倫理を中、極とて、考らう、考らう、考らう、所、本領

あるは、心之れを取ら、但し自信なきことと決して取
らざらば、余を以て根底とするに在りて、自信なき
まを、試験を以て初め之れを、後あるは、材料法
を以て、全圖何れの地に、柱を以て得るべき材料、これ
のみ、その神理を説く、一え、其の考ら口の一端あり、彼
れを以て、氣板のことを、丈夫と讀む者、と云ふは、
とあるが、多別と、能くあり、自分の雑徳の本領と
するに、これあるは、自分の考ら口の、地味本位ありと云
ふを、居る、係し、實際を考らう、と、考らう、眼新らしく、考
らう、他の雑徳、これ先人し、新に考らう、題を掲げ、彼れを以
て、考らう、地味一方を、固守する、と、考らう、考らう、係
し、倫理を中、極とて、考らう、考らう、考らう、所、本領

辰野社新書

夢舟居士

廟額松柏映晨曦、
廟額松柏映晨曦、
天樂地、
天樂地、
廟額松柏映晨曦、
廟額松柏映晨曦、

中川毅

霞繞龍樓曉色新
高林大跡海無塵
微臣恭跪階前拜
的此神皇才一春

田邊 崇光

燎火蒲葦鷄唱
長廟庭奏樂志
鴻志
黎明先自天
蒼野戸眼見
三重日出
光

五言六款

里木安雄

穆々明裡地
洋々摩慶時
晨夜舒繁樂
初日絢丹墀
盟醜敷振林木
神鴉集彩旗
干支紀辛酉
布葉緬根基
祈穀韶韶爾
占風祝贊嬉
履端靈時側
味爽事洁宜

肥田四畏三郎

紅塵飛利少
四境誓祥煙
松古龍吟和竹深
寫

12 東田駿

新連天壇冠冕爾
雅樂武韶宜
華表
鷄高鳴
曙光映九阡

の閑に乗ん
新年利其の
賀章を捨
る海をま
約
六十中
四五喜
區の
つるもの
ありん
心は
世
こ
ま
ま
年
以
味
あ
る
こ
ま
ま
を
心
す
新
あ
り
七
波
本
年
の
言
直
々
上
款
の
下
す
を
画
き
こ
ま
ま
の
遺
痕
の
印
に
な
る
擬
し
大
々
テ
々
ウ
と
あ
る
之
例
の
お
伽
武
工
川
ろ
ろ
文
行
を
日
言
直
々
を
前
に
録
し
な
ん
か
こ
こ
に
な
る
す
あ
る
之
例
を
何
ん
と
も
好
む
入
ん
ぞ
の
物
馬
額
に
記
す
移
る
を
画
し
な
る
こ
ま
ま
の
遺
痕
を
淡
水
喜
月
と
自
畫
し
な
る
を
素
と
こ
ま
ま
の
例
を
題
し
な
る
例
の
お

角入石新と揆すまゝ東本銘考法主大谷玄漢のち
り之れを揆するまゝは刺裏に洋字をいし名のあるものを流
石に時勢と感をもたせ、例の山陽海文に執筆する
三枚先右のの時をと銘し、まゝのこと如めし、
旭三三枚の禮ありとまゝより森思ひつきまゝ山陽
癖あるもの、二風とてハ浅雪を免らんが、大坂の
踊りの河匠梅をいし扇此と印癖ありと見え自
刻の印大小四款も梅をう、大印細字を自刻の
石印と見え、可なり、の刻こそあつたの感をもたす、某
歴史家まゝの歴史に本年の辛酉ハ神武紀ハ辛酉
ハ四十四回ハ辛酉と注しあると見え、流石に歴史自
尾まゝと一一笑す

〇佐竹庵下ハ印三款の篆刻と見え、此人ハ陸奥と辨
す、先考宮内省に在りし時友と善し、余家笛を以
し早稲田園出飲の花を印を刻せしむ、(お牛印を
園者賀利如の花を印を)又余のわりの長楽茶の身
の古瓦に撥し、一印を刻す、今ある茶やりに在り、先考
没するの日前め、園者賀利の印、奏刀、為り、余忘ん
人と、姓をまゝ、名を、而も、姓、の姓と、俗稱、
に、家、あ、こ、ま、あ、ら、あ、ら、あ、家、あ、ま、あ、一、雨、来、十、数、年
偶々、江、年、高、四、七、峰、園、府、漢、の、在、に、お、し、奥、田
芳、考、と、流、次、此、の、日、印、人、の、他、在、自、今、あ、ま、内、あ、
を、仕、す、ま、ま、を、ま、ま、初、め、し、姓、名、を、流、石、を、得、り、
を、得、り、余、遠、徳、の、流、石、あ、ま、ま、流、石、を、得、り、
を、得、り、余、遠、徳、の、流、石、あ、ま、ま、流、石、を、得、り、

をらぶ蛙坐宮内省の車轍をたう人多くゆきんと
わが易刻ハ一家を為す近來の心を見入るる十数年
間をたう世鏡をみる余の印の巻の巻を供つて
之れを換めんとも
一月十一日誌

詩情茶味



○若體の字のし何知とも并しこき山崩し方あう
例へば愛の字を愛と書き夏愛の字をを愛と書く
を下の「愛」を引く「心」とするあうるんとも
妻も夏も心も下なあうるん中間なあう解し
類きり似たり然るも説文に因り古字を安ん

ハ愛夏二字共に心の中分にあうるん最下
とあり一と下を引くの源流をのりすへし
○何ゆゑも現代語に於て種々語の中を云々若
谷七波のこときや問相手の文人々も現代語に
名を改せりるを得ざるん今の少供に理解の出
来ぬ語を強々用ひる氣の日付さるる似たり例
ハバカを以つて互ひに初め所さる一上一下下
ハツシるゝ形容さるるも利危今の子規の解
し得ずハ波も時勢後んと滑ハさを得ずと
○故の書 其功 経史論在中山田方谷の一文
を示す書王元成公全集後也此の文老らち己の
河井造り助の書に關す河井の傳を福島の海兵衛

七一七前巻を製巻ししもの等ふ者取せし。

此文と經文論存卷十五にあり、沈文甚大なる文を加除
し、字不あるもの、原文を板抄あり、餘を論存に就て
見よし。

一月十三日記

丑年北條の詠、河井の條を互るときき、未だ北方公
の文を兄るこむらず、此迄身を供すと云ふ

〇一月十四日散策中神田の玉店に二三の回香を
得たり

寒山子詩集管解

二冊

此方釋交易の註釋了る所、交易の
傳未あるへず、杉室、連山其の羅
るること、序文に依り、世に知らるる、此傳

其河洲坊攻詠の詠詩を以りて、其
向を傳へし、序も寛文辛戌九月とあ
り、又巻尾に寛文十二年仲夏江戸
神田飯沼河中野氏終三ノ奥田重
郎兵衛板行とあり、此傳の時代知
べし、此方寒山詩存の最も詳細な
るものなるを、極めて稀觀の者として之
を知りしもの甚に詳し

貞和聯芳集

四冊

寛永大木と作をりんとる場所
首巻を關く、康長河日高傳の詩
を見しもの、此方題楚とあり

近世書史

五冊

細川潤治の明治廿四年頃刊する本を
今も今も此書甚比稀く徳川の
書家の小傳を載す、漢文也

又母名海屋の傳を以て海屋の家世々画を善くす
 の七の也 海屋の子孫を以て海屋の家世々画を善くす
 海屋外祖矢野其子狩野常行画其子典博
 孫典雄世傳家学、為河波侯畫畫傳海屋後
 留氏受著色法其母亦好畫画海屋每有作又
 示母氏乃大喜是以惟用力於狩氏畫画至留
 氏及母繼歿後而去北郷南遊為一家蓋於畫
 道素有淵源助之以文學其享盛名、固非
 偶然

近世画史中関方畫家二十數名あり左の如し

玉娟	<small>所田氏森蘭言の</small>	金瑛	<small>茶田志山室</small>
雲英	<small>下條氏雲室の</small>	香蘭	<small>深海氏在平白井</small>
香香	<small>句田甚山領の</small>	三保	<small>香柳之</small>
袖蘭	<small>大倉望山の</small>	秋山	<small>櫻井雪信</small>
田葵	<small>本村川竹の</small>	英之	<small>佐脇崇雪</small>
春沙	<small>五原香所</small>	玉淵	<small>池野大雅</small>
幹	<small>谷文晁</small>	来會	<small>高英</small>
舞英	<small>日上妹</small>	雪信	<small>久陽守景</small>
應昇	<small>鍾田坐松</small>	細柳	<small>山本北山</small>
露香	<small>三熊花歎妹</small>	細香	<small>江馬氏</small>
香雪	<small>水上甘蘭堂</small>	琴尔	<small>上田氏</small>
茂典	<small>五十郎兼喜</small>	紅蘭	<small>梁川景雲</small>

少琴 龜井玄庵世
小齋 武内氏
千代

玉菴 備後人八田古秀以
正慶 三好氏

○印是款と傳入壽山石高七八寸許、刻文篆体



此印は、
自刻自用
也或磨して
下駄印と云ふ
且々名家私印の
部に置くと云ふ

一月十五日の朝録す。

○中川柳おの子の初、あじ地花をを遠く満途
林月の背景あり、あじ清郡不見の文字也一待
を候す

慈雲經綯、善天濡、法界如今尊我無盡

出地花尊如相、加名流若錫杖好國顯

清郡海濱有北流景今試字之

并賦七言以志神往

柳の友人教

余柳外に謝して、あじ急に禁漢して書高に扱けん是ん
去家の謝目法せと
白日記

○近衛家所為の古文書六十餘種を撰選し出版
名づけし陽明世傳と云ふ近衛家の系譜陽明門内
出にありたるを以て陽明家と云ふ此の古文書は陽明
の書と云ふ此の古文書は陽明家と云ふ此の古文書は陽明
我早大田と銘し書跡ありつ傍り多しけし相
才相翻玩す流石に累世関白家の多しを其
の家と云ふ断簡零紙貴重の中史料なる
たるありし也又者やり殊に殊と云ふさきり希世
関白と云ふんは道長日記と云ふ其の
能事ありしと云ふに於て歎く其のさきり其の
記すの味ありしと云ふ其のさきり其の
自叙文、式書、の生と氣ありしと云ふ其の書記を

殊に多く選み出し其の備あるの用書多しと云ふ
此の記の中にも道長の子頼通の録（以下）
も著しあり頼通（以下）の能事多し
又信範記の（以下）部令も載せしり保元平治の
戦ふるの事と目録の事も録しありしと云ふ殊に
と云ふしる家記のありし家と傳りしありし名傳の
異時の数ししと云ふを載す其のありし大坂を
のむの如き行成佐理ありし家と傳りし事傳りし
のヤの甚に多く、頼通の陰謀、頼通の戦
感を載しし得るものあり、此の古文書と云ふは
アレートと云ふ一函に載せしありし書ありし大
もと附する考証一冊を以てしりありし湖南

萬葉集 田中親美等此の辨枝考終に與る
(一月十の朝記)

信範記一名人車記又兵範記とも云ふ信範を
陽明家の女侍し信範の縁ありしは白草の記荒
千陽明家の侍りし。田中親美等此の辨枝考終に與る
秋の巻の七月十一日清盛義朝等後白河天
皇の御座所東三條殿より出て山崇徳上皇
深養義為朝等と從ふに據り終る白河北殿
を記す等しし所謂保元合戦の事也又此
始末を記すも(後也)

○舊撰五卷先とて割愛を得る拍山亭主
原詞二十首を録し与二枚折原風の内を

移をも施し与百花と云ふし其の事あり
者の名を録し其の支儀を記す其の事あり
と云ふ名を録し其の支儀を記す其の事あり
と異ちを要せし余此の原風の割愛を以て
中の五卷に田中親美等の事あり其の事あり
高うしやまふし其の事あり其の事あり
三輪潤大の事あり其の事あり其の事あり
に揚る浦上春原の事あり其の事あり其の事あり
おし時の心しし其の事あり其の事あり其の事あり
葉皮粉あり其の事あり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の事あり

○田中親美を前年より其の事あり其の事あり其の事あり

其と感し改削維撈大い、面目と改め頃為改削現
中絶句を刊し、各首に旧心を附載し、彼此對照に便す
一夜後、改削の新詩甚に直るると云ふ、巻尾に
自朝録を附し、舊心の非なる個處を指摘す、
舊の詩に忠實するを自と多しと、今才、今心の
集を物す、
一月十七日

抵蕪州

雲霧山名共潮溪、人在吳江三月舟、揚柳桃花
春有畔、
吳淞舟中

沙痕遠近散牛羊、野廟門前柏影長、
已江南烟雨裏、垂楊行處更垂楊

五原河天柱峯 五原中

星々層々小峯勢、雲未萬壑似翻濤、不知何
石場皇鍊補得春天一柱高

鴨灘不見

烟雨楊柳帶條條、越聲舞袖不勝嬌、
綠柳趁、才四更三鼓亦橋

曉景

鐵鼓風生曙色開、颶輪一路度崖危、
回頭阮氏家山影、殘月他人百里來

題星石道人墨竹

道人畫竹影條條、似使清風吹滿橋、
麝香松烟香一斗、雪盡溪深散早秋

雪後

春雪初開白玉寒，梅花新發冷香間。夜來松竹
枝皆俯，放出欄前數尺山。

在石

四月花飛苦子休，行人此去上歸舟。夜來風雨朝
未歇，春水如雲散又流。

星岡茶寮似山口松陵

古木寒雲一迳斜，蒲窗恰似老僧家。茅簷如
水古苔上，時落山房三四花。

在石

蓬萊仙瀾水中央，缥缈神宮繞樹長。半起寒
潮湧塔上，月明一百八迴廊。

耐雪入都置酒談前游

雁影掠波月當樓，忽憶山陰道上秋。神木
百年初廟古，無雲不散是雲州。

歸心似同行袖木玉村

山陰游履共君同，探勝歸來興不空。衣上白雪烘
有出，馬蹄十日亂山中。

山陰道上中隱收

山陰雪木蒼蒼，惟有杜鵑愁未銷。一聲啼向
帝之所，月落溪邊殘夜潮。

已酉春攝別墅于狐吟乘興一乘此

紫綬金章年耳不少，漁翁樵叟席相分。紫巾
咫尺青山淺，水種梅花禱白云。

汀洲草長水光空百丈瓜瓞野濱東
蟄破一群蝴蝶夢在帆曳之葉花中

此等の山在野塚前、日有喜梁三月船、以雨概花水
新漲、櫓勢如、下南川

草閣薰風酣午眠、醒看山色碧于烟、門前欲
種為花編、新借溪南三畝田

為花雪白福免涼、七月南嶺勝北嶺、終年地凍
魚蟹利、全家住在新山雲中

水邊人家不掩門、涼煙滿地月無痕、早二漁
山、雲中滅、殘夜秋生歎乃村

白吟

三月秦川雨始晴、溶溶一色難、江湖長長長、為衣

白綠淨春海深深不成

送竹隱自備前移岳薩摩

少道球摩川盡頭、不山麓、秋來水、山、中、三、日、
路、可、下、脚、踏、層、雲、入、鹿、角、

○今日午後例の月、今七、大隈侯の、向、こ、つ、ま、く、侯、と、三、
時、可、に、降、る、法、論、多、く、侯、と、ま、ま、と、七、徳、川、の、御、代、
に、日本を統治し、た、も、り、の、将、軍、と、云、い、ん、と、も、り、の、神、佛、二、
道、の、倫、理、の、董、紀、の、人心に染潤し、た、慣、習、と、種、
々の例と、奉、け、七、論、を、も、り、之、ん、に、次、き、米、四、の、畝、の、
体、面、に、つ、き、論、評、を、た、か、し、談、話、中、に、米、四、の、畝、の、
這、や、米、四、の、畝、の、鈕、を、も、り、も、課、税、を、為、す、と、

のさうな事を為すは、北の冬を金う積り備うし、七
葉の位のものさうん、之れを抛擲し得ざるを、大人
氣なきを言ひ、垂米利加を何れも保護税癖、
いつまでも離れ、説き、當りてウ井ス、コンシン、
長のもうし時、自分をも、垂米利加の定法の海將
をして、そのもと、俗の豪族を放ち、おし云く、米
の定法、物定を七年の年、月を費し、あめ、の英傑
として、南北、戦多し、困難を思ひ、
と漸やく制定せ、て、あめ、に、
鉄蹄を感し、
す、
故、
12
田

る、其の件を、
即ち、
名、
元、
え、
笑、
其、
細、
武、
と、
此、
誓、

其の甚しき備をも六尺許、刃傷被るの態あり
 而も顔面被り傷るる上、生れ来也。正金銀行四十
 年の記念として其の創立に重大の縁あり
 候に際り、此の如き事あり。

大正十年一月十七日
 侯曰くまふいおれ御きとう此の如き事あり
 候に際り、此の如き事あり。

○石井研を渡世結の換印を考案し其の結果を見る
 表す。高世結に改印のありと寛政の如き明治七
 八年迄に及ぶ八十年間とあり、此の間に換印の方法
 二多ありの要あり、其あり七期に分ちあり。

第一期 極印時代 寛政一—文化元年

甲、前の極印単行時代 文化二—七年

乙、極印有副時代 文化八—十一

丙、後の極印単行時代 文化十二—天保十三

才二期 名主の単印時代 天保十四—弘化四年

才三期 名主お人双印時代 弘化四—嘉永二年

才四期 名主お印と年月印 嘉永三—同六年十一月

三印時代

第五期 改と年月と双印時代 嘉永六—安政四年十一月

才六期 年月単印時代 安政四—同五年十一月

才七期

年月改三字の一印時代

安政六年甲月
一の治八年

徳川時代取締法の便寛猛に与り或も自改の行を、捨由
印せしめ或も仲間改の法に據り或も行政法に与り名主の
捨印せしめ一人を以て私あるを慮り二人の名主に連印せ
しめ等号見せしし、或も時代の錦語の亂向に數印の
刻しあるやの階乗り、捨印せし、若者も此の捨印の時
代と確らぬ、直らぬ之れを以て錦語刊行時代を此の
便に供せんと此の新定に如力しなるとあり、巻尾に圖
扇繪の捨印に就ての考證を附する、一月十九日記
○五峰本坊より毒飯屋の交の心五廿二日泰十西帖を平
首尾に題詞とらふ一帖の首尾に題して置く

城山古書亦長白、城人古家山亦四

ふん王前公の句も我々のものなり

詠するに似たり

十年考卷紙如山畫案今朝出有實、後

出葉すやりのを此名を始年人可

是は毒飯屋山史の語也

中二帖首尾に云

親考筆流

尾三云く

揚峽高舟游交の愁雨立登四月中唯

離身穴元一板葉、横掃十丈長傷来

贈書紙画史詩語代の故

五峯、此石の石をて作也。此等題句を得て二帖彫く似味あり

一月十九日録

○六朝法帖を購ふ、大魏興和元年李仲璇孔子廟を修むるの碑、此碑文字之特徴あるを以て支那に於ても好碑家の風に殊とする所也。大体を素正の楷書るも、其の筆力隸に近き字を交ふ。古雅洵とに稱すべしものあり、今二三の字を掲出して其の一斑を表す

五 故 斯 風 韻 平

元 出 漢 廟 竝 方
有 大

漢魏の頃隸と云ふもの則楷、今の所謂隸体の多く交ひる。固と其不也。此碑書字、益すもあつた。此故也。

一月念日録

此碑業者の名を知らず、李仲璇と兗州刺史趙國栢仁人也とあり

○此夜寝後芳春夫人偕と後す芳春夫人と前田利
家の家より此の世に前田家の海軍兵に係る此
夫人と男房の間の関人と呼ばくは世に多し其の
代の種々のことかゝるんはあつた後あつた其の
もろあつた夫人の様子を稱し切りの氏前田家に美ら
十三日あつてもあつた然れは十二日利家の家
とさういふし早崎早生、此の夜とさういふ
此夫人の初め利家の家とさういふを稱し切りの氏
の地位早くもいふを前田の家とさういふを稱し切
る一力を携はえしり継来し夫人曰くおれは
戸端合渡をすしつらし、新の起言の河相見え
バ利家の此夫人と結婚の時も中公とあつた其の

つらしとさう

巻五 政春古兵衛

芳春夜を秀吉公政不換の

御肝煎りしり嫁娶、御の身をも御互ふ知
音いふ、宗土より、御流危あつた屏より、木槿
垣より、の内のあつた、書物御方比方二つ
より御流来り、此の由也云々

右のことき、御流りしり、御の身をも御互ふ知
縁家方よりしり、御流来り、御の身をも御互ふ知
又左に、しり、御流来り、御の身をも御互ふ知
まへに、御流来り、御の身をも御互ふ知、芳春夫人
北政不換、御流来り、御の身をも御互ふ知、御の
御流来り、御の身をも御互ふ知、御の身をも御互ふ知

此所を芳まをく人の因所を交へし軒旋大らつとの
石田三成の反抗ありし物も、氏郷の舊欲安堵を決
行せしめり、利家の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
大光にまゝ受けしを、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
おぼしき、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
人、四十九年、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に

化権田を物りたることを、偶々さるる春、公と見え、
也、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
を利家の切し、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
雪つとも、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
河姫のあめ、十四才、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
と京都、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に

公のあめ、十四才、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
大光の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
折の跡、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
中二西の丸、才三、松の丸、才四、三の丸、才五、加賀殿、才六、芳
若夫人とあり、六人の政客の由り、此の夫人のあめ、
例、摩河姫の跡、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
遺言も、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
得て、此のあめ、十四才、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
遺言も、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
入つて中裁和解し、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
夜話集、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に
の大岡に、公の遺言も、公の股肱として行を修め、遂に

を極めたり後傳え今その園遊會に似りての
高のいふは、模楷を在りて其公に高き物と
いふも、其在りて廿五の世子の在りて拾し
七の傳に在りて其公の平なすかりおあしと
誦れしは、今この園遊會にもよきことを
りたり、其も同法体也、其公の在りて前田
物家原に快うと云ふも、此の花見の
後、其公と其公の利家又隠退し其公の金
に徳川氏に傳するも、其公一家のあはれ
保つて其公の人質とて徳川東江に在りて
りぬ、此の人質の日月をたうること十五年と
其公、^大園遊會の事を受けたり、圓の夫人

刺髪せしは、自家の花の春居るる故を以て
春の字を法漫と擬みたり、其夫人の像と
大夫面目、其氣神然と云ふもの、此の夫人を
言ひ、其のいふは、使辭と云ふもの、此の夫人を
と云ふは、又畫をよきす、前田家に在りて墨然
を其に在りたり、夫人高つて良人のいふ陣
羽衣を著し、自らも鐘撞の下畫と云ふ
つづ、刺髪せしは、其のあつたるなりと、其
の字も、此の心、其の氣を著し、
一月二十日録
○昔し紙の書あり、時代を及故を翻して、其
の用を著し、こと、其の國をも、侯約の上
り来んこと、其の、後世此の及故が、貴守の意

味を生ずること従ふあり、現に近衛家の陽明世徳
文に：徴するも、昔その重成堂のむや頼政のちや
その子仲綱のむの侍ハるもの令と、侯約の政の言
ともし書あつべし、^平を舞えす紙花月を綴ると言
ふもやめ、^信頼政とよその陽明家の記
事すししかる地つ陽明の家名ハに頼政に克し
ざるあつた名家のちの^信頼政の^信頼政
；記録と心るもの^信頼政の^信頼政の^信頼政
の墨蹟傳に保るる^信頼政の^信頼政の^信頼政
自然なる^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
せざる^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
の下又傳、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政

えんのかせ

田上記

○寸許を互に千行と英集を以て結果、其考の本を心つた
動機、つとむ十七の^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
と見ル、然るん^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
思ふ一則、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
豆帖であるか、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
千は入つて居るもの丈も三十^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
十ものこととあらと後者の似顔に、武ある終にの、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
瓜島第回中の、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
ある全傳、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
板の刷つたもの、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政
と云ふ目的で出来たもの、^信頼政の^信頼政の^信頼政の^信頼政

の四庫全書を翻刻するも付余の意見を徴す、余の
 之れに爲して是より事業することと云ひ、實用論として
 ハ恐らく成るべしと云ふべし。却つて骨董として不部
 敷を此のところにば或は成らん、相當に多量のものと
 おもふべきハ尤の不可なり、圖書館のせむを徴力の
 七の三割程度之れを得るべきと云ふは、おぼしむべき
 二三果をもえて、其の者も供す

- 一 原形の複製全一却上若十萬の目録
 を附するところをも、廿少數の富貴を、ま
 るを以つて目的とする
- 二 價を廉くし、出賣をゆるぎ、目的を以て
 思ひ切つて、形に印刷すること、形を古

香室の如く、又は割合に流布の範圍
 廣くせん

- 三 四庫全書中、既に板刻のあるものを除
 外し、未刊本のものを採りて刊行する
 こと、是れ後、世界に得るべきと云ふ、尤も
 提議せん

三本本の四何んこと云へ、ハ第一、業却つて成印せん
 何んとするんば、骨董として、あるべきは、筆墨家
 をいふと、する所、断り、少く、あるべきは、丈、尺、丈
 骨董として、その價、あるべき、あるべき、あるべき
 支那に於て、徐氏の如き、如き、此、合、あり、え、る、二、万
 部、出版、由、る、二十、部、を、世界、を、相、平、に、する、

八十部を支那の語に領り豫定する二部の價二万
元なりといふ。

一月廿一日記

○明の王穉登の王百穀集坊間甚に稀也。今日得の
所、朝川善庵の卷を以て明版に多し。善庵の
ものも此とす。此書二冊に別本あり。四部
四冊と為す。即ち左の四行を合冊す。各行
一冊と目録あり。善庵の附録。吾波集の版式
他三種と異也。而七卷初志

- 一 燕市集 上下
- 一 竹箭編 上下
- 一 客越志 上下
- 一 明月篇 上下

一 吾波集 上下

○一休宗純の詩集狂言集を記して漢文を免ぬ。版
に上下二冊。序跋あり。詩の物あり。和歌あり。其
跡其家の氣満つ。此傳而の臨海。或の卷あり。又
撰し。或る意味の自ら主義を主述し。さうして見
り。詩集あり。和歌あり。酒を能くして曰。倭の酒あり。
えん。ことカ。酒を濁。と放言し。等
こと。と見ゆ。女孃。閑。詩。集。中。た。も。
美人陰有。仙。花。あり。と。女孃。あり。と。美人。孃。あり。
以。孃。欲。換。詩。文。と。羅。漢。お。孃。坊。間。題。孃。坊。
と。あり。と。人間の本。結。と。解。と。云。つ。する。もの。他。の。傳

の詩集と大りの面白きを異なりする所あり、以美人媠の
の題に因く

杜牧若蘇直是我徒狂雲邪法甚難扶為人輕
賤滅罪業外道波旬我失念

盲美人森侍者：就七教首の詩あり、或は午睡を為
或は其の髪髪を脱き或は紙衣を借して其
を護し或は
の湯の清洒するを乞ひ、乞ふく詠ず、而して最後
に左の詩あり

余寓蘇園ハ余有年矣、森侍者也、余夙
彩已有嚮慕之志、余六知焉、然因循至今
矣、辛卯之春、邂逅于墨江、以素志、則諾
而應矣、因作詩述往日間、河湍之懷、且

記今日來不來之喜云

憶昔蘇園居任時、王孫美答聽相思、多年
舊約即忘後、猶愛玉階新月夜

盲森夜三伴吟身、被庭答答私語新、六約

舊尊三會曉、本居古佛常般春、約殊勅下

木桐葉落更回春、長綠生花旧約新、木林也深

思、忘却無量億劫高生身

彼も有り、狂雲と云ふ、其の狂るる事、來而特
徴あり、彼れをあのの深處に於ける、自狂雲とある
は、相違なき

一月廿三日記

○余が寸珍を七菟集すと云ふ、昔海ハ翔寸不日
東坡の十八羅漢の頌を乞ひて寄せし、余一後

を經年餘中二冊を以て、漢書の傳を備へ、編定を刊する所の
羅漢國贊集を三冊を繕ひ得て讀む、八朝の
帝一は東坡の跋あり、即ちこれに就て一讀し、東坡
は此羅漢國を得る由來を云ふ之れを子由に述べて
の跋末を序跋に依つて叙り多分の興味を云ふ
今大略を叙す

東坡澹耳、福建中、海南芸圃の二あり、
同く亦唐末蜀の金鉉張氏畫く所の
十八羅漢國傳を得、漢書と羅漢を画す
を以つて名あるものなり、東坡も之れを得て
是を以て空谷の師友を乞ふ思ふありと云ふ
其の世衣襟を易く、襟を献し、菓を供して

敬不^レ取^レし、東坡の外祖父程公少時京師に
遊び、博學蜀の亂に遭つて糧を絶ち、博學を
得ず、旅舍に困窮中偶々十六人の僧あり、程
此同色の人なりと云ふを各々二百錢を出し
之を皆りし公を帰らし、後程公此等僧
を扱ふ事も得ず、思入るる十六の僧あり、十六
羅漢傳あり、やと威日毎に大供を設くる
こと四十年、公九十に達するまで二百餘供を
設く、今據るも亦九死に困厄するの時
此幅を得、宣に希思、二海に知やと終に十
六羅漢の跋を收む、二文苑の一日、大在流
也、然るに東坡公も此幅を弟の子由夫婦

此贈るべき書ありて坂を方き遠く東へ一に當り北直話
を潤色し讀むに執味ありしに故公曰く此の十
六羅漢像に奉供を設くるべし則ち化して白乳の
より或は凝りて雪を成す杭李の昔の事と云ふ、此羅
漢の慈悲深重なり神変を現するものなり御
奉時の敬を修め其の生るに遇ふ毎に日供を
設け日年を祈り福を集めんとしと故公ハ條法
を弄しんその思致を便を言曉すし此の
旨深淵の頌と共に、藝苑に傳誦せんとす
と云ふ所の偈ありて云ふ也 一月廿四日記

題詞ニ云く

梅平為是士梅平歎是仙有北良
師友然契大三十年

梅平歎是士

余如飲酒初把盃有草于之於古心
前之想院以漫利天地無門處
乃放筆心此梅
梅溪又談

○此初獲及王百教集を讀むに往く意の待あり
今閑に乗し二三を抄す

○姚江三首 第二

日：清江日：山。看時曲：聽溪：：語言以如
衣帶。不繫。卿心。一。又。色。

山縣行。未。不見。花。而。舟。一。葉。不。如。瓜。乘。勝。已。心。干。
迴。結。莫。笑。江。流。曲。似。蛇。

菁山道中 梁四首 第二

烟渚八百桑。沙田一半秫。人携席去来。舟載
少。出入。

雲在青木葉。紅水淡溪痕。綠黃裝戶鄉。
駝鷄下茅屋。

自白塔嶺至五雲。

複嶺聯鏡度。崇亦命侶游。潮枯絕。及岸露
蕊。不。飛。舟。曉。嶂。卷。差。出。寒。江。曲。折。流。高。

春無百里。何處問年衰。

南屏道中逢范伯楨兄才

雲中握手意。匆。紅。村。古。山。欲。刻。重。惆。悵。
相逢。又。相。別。南。屏。寺。裏。一。聲。鐘。

費宅別范于公

上書不得去。樵悴黑貂貧。寶劍誰知也。
茅。高。易。之。人。草。移。法。仲。完。花。別。子。思。家。講。
非。為。無。技。惜。深。悲。遠。所。親。

史丞相墓

石馬無精靈。離形為鷓鴣。石人寒雲中。苦菜生
衣。裳。一。坏。青。杉。根。漢。成。荒。岡。借。問。葬。者。誰。
云。是。史。衛。王。當。其。初。葬。時。威。儀。何。煌。煌。東。

園出秘器，題奏以為藏。崔魏憐凌寢，高者如帝
皇。千年寶玉氣，上有青霞光。匹夫夜視之，執兵
發玄房。丘壑皆哀鳴，鬼神亦彷徨。何不鑿南
山，萬世錮黃腸。豐碑天人書，零淚無成行。豈
無雲仍孫，相視徒悲傷。我聞箕山塚，邈者不能
忘。推蘇莫敢侵，祖豆常馨香。始知人守柔，
不如清風長。陵谷有夷遷，清風無存亡。嗟！
後來者，拊德乃其良。

織錦辭寄侍兒

燈前織錦雨吹寒，忽憶行人未渡江。織去鴛
鸯才一半，侍郎歸日始成雙。

孤山謁林和靖墓

玉骨舊埋處，草堂今半廡。梅石堤上六，山色水
中孤。蒼在梅俱落，神恬鶴可呼。青蘋不用
薦，門外是西湖。

紫陽庵了真人祠

丹壑斷人行，琪花洞裏生。亂厓曲地破，群象
逐峯成。一石一雲氣，無松無水聲。了生化
鶴處，蜕骨不勝清。

夏至日渡曹娥江

會稽芳澤夏至，朝日散群峯。問道有千里，渡
江非一重。空山祠粉黛，荒塚葬芙蓉。寤寐無
人問，曹娥共蔡邕。

壩上留別張孺毅二首

鷲鳥難累百、不如一鷄好。群芳徒媚、安能
及朱草。靈物不出世、衆目眩奇寶。烈々張璠
生、英々躍海島。島中照夜珠、明月无浩々。
自從生君後、頊々不足道。結君一十載、相逢
恨不早。平生重然諾、為我乃傾倒。送君海
隅、把臂心依依、依々亦何為。似恨見面稀、
不恨見面稀。所恨知心違。須臾隔雲漢、焉
得不沾衣。

銛々龍在刀、燦々棠溪鐵。潺々床頭泉、皦
々袖中雪。雷々赤電影、淋々白蛇血。脱君
匣間佩、就我腰下結。贈我豈無意、可以助
俠烈。平生國士心、對面為之熱。黔首何紛紛、

所貴者豪傑、々々狗知已。豈為衆人說、干將
刈園葵。不如土中折、服之虹霓生。慷慨此
君別、

一月廿五日手錄

の本邸の一色衣：世尊寺法帖の版木一枚を花す而
刻す、おゝ北法帖の刻者町田延陵の蘭亭序序を
おしし、絹のマリリ一枚あり、延陵の玉初めを寫す、
りく能むこゝお衣主人の流りとすけ、町田延陵
り上におそ妻の郡山白村の人より、前年其家を訪
ぬと貴方を買はんともいふ、如何も山間の僻所
あり、家も古と狭く、いんゝ延陵の田をいそ

きつて位(一) 遺(一)と敬(一)して何(一)も(一)唯(一)世(一)を
奇(一)法(一)一(一)部(一)を(一)有(一)す(一)の(一)も(一)そ(一)ん(一)を(一)買(一)ん(一)を(一)り(一)か(一)こ
九(一)の(一)家(一)一(一)傳(一)入(一)の(一)も(一)そ(一)の(一)を(一)賣(一)ら(一)れ(一)今(一)も(一)そ
駄(一)働(一)き(一)ら(一)し(一)と(一)云(一)ふ(一)板(一)木(一)七(一)廿(一)早(一)多(一)度(一)も(一)其(一)家
ら(一)傳(一)入(一)ら(一)る(一)も(一)そ(一)の(一)を(一)買(一)ら(一)れ(一)偶(一)一(一)近(一)世(一)も(一)も
偉(一)人(一)傳(一)入(一)ら(一)る(一)廿(一)六(一)年(一)高(一)橋(一)肉(一)換(一)著(一)と(一)云(一)ふ(一)さん(一)と(一)云(一)ふ(一)つ
き(一)傳(一)り(一)多(一)し(一)ゆ(一)ら(一)中(一)を(一)捨(一)ら(一)る(一)ん(一)延(一)岐(一)の(一)傳(一)も(一)も
韓(一)天(一)壽(一)と(一)も(一)似(一)る(一)人(一)有(一)ら(一)る(一)大(一)要(一)の(一)を(一)傳(一)す

延岐姓町田氏名清興字子春通稱ハ十五郎
其弟烟二名也、般若窟、昆耶離園皆其
別荘也、吾妻郡山田村の人、其世の農を
業とし、邑の貴族に知れ、七款敏風成文

貞其意仁(一)して佛(一)を(一)好(一)む(一)僧(一)侶(一)病(一)の(一)後(一)も(一)の
あ(一)の(一)ハ(一)家(一)に(一)養(一)は(一)れ(一)給(一)ふ(一)と(一)云(一)ふ(一)一(一)傳(一)深(一)く(一)之(一)を
徳(一)し(一)其(一)友(一)幾(一)人(一)を(一)薦(一)め(一)て(一)法(一)を(一)授(一)け(一)し
た(一)延(一)岐(一)年(一)幼(一)傳(一)入(一)ら(一)る(一)也(一)其(一)の(一)其(一)を(一)
受(一)け(一)る(一)を(一)一(一)つ(一)通(一)習(一)し(一)頗(一)る(一)熟(一)す(一)善(一)し(一)文(一)性
こ(一)初(一)め(一)し(一)て(一)之(一)を(一)傳(一)ふ(一)平(一)澤(一)元(一)愷(一)を(一)以(一)て(一)其(一)
手(一)物(一)す(一)る(一)所(一)の(一)住(一)史(一)る(一)家(一)四(一)乘(一)雜(一)池(一)也(一)傳
撰(一)著(一)が(一)多(一)く(一)電(一)數(一)十(一)万(一)卷(一)に(一)及(一)び(一)又(一)般(一)若(一)窟(一)三
る(一)書(一)を(一)手(一)書(一)す(一)行(一)の(一)物(一)氏(一)を(一)寫(一)し(一)佛(一)文(一)の(一)書(一)の(一)王
を(一)業(一)と(一)し(一)内(一)典(一)一(一)傳(一)大(一)隆(一)と(一)云(一)ふ(一)花(一)右(一)古(一)畫(一)刀
劍(一)を(一)鑑(一)別(一)す(一)る(一)也(一)其(一)一(一)見(一)し(一)て(一)其(一)原(一)を(一)判(一)す
又(一)考(一)法(一)を(一)好(一)む(一)也(一)其(一)東(一)江(一)を(一)以(一)て(一)後(一)を(一)鐘(一)王(一)

刻す一法候に就き定式刻の以國事代を得臨摸
あること八千紙其他和漢名賢の草録家
籍碑碣金石の文皆平生精力の注ぐ所也
常々漢化帖濫刻し其を去るのを喜ぶひ其
意七帖及智永の千文を鑑し之を世に
公曉る尊田親王の書法を喜ぶひ其
元々修め親王の真蹟を以之を刻す世
尊寺帖といふ山田村々上毛の一山村に
も延陵の名都あり池也一時其書を
あ皆延陵を推す文化三年十一月八日
下年六十四延陵の名盛んたりや其戸
にん高任の海義と云ふ書法を其を以

名といふ所歴に就きむの以國事を
あといふ講義果つて其盛んの際あり
しと名いふ故に其書法を以て其
りしと云ふと一日列に使者來る偶に
草を採る使者延陵を以て之を其
如何を問ふ答を以て其書法を以て
其書法を採る者延陵と云ふと其書
延陵を以て其書法を以て其書法を
人ハコハクナラシと又加賀侯に招
し其書法を以て其書法を以て其書
の其書法の有馬侯の書法を以て其
の書法を以て其書法を以て其書法

こと詳の也、又首部に徳記の由を述べて、
く成人と云ふ及心なきの如あり、此書先年五卷あり
傳りて一巻も狂言と云ふ、今一本を得て、架中
に置くと云ふ、さうするやと云ふへし、一月廿六日記
の近世上毛偉人傳に就き上毛にゆかりあり人物ありや
と云ふ、こゝを何人の人を知るやうし、知名の人を
上州出身の、さうするや、聊に物あり

- | | | |
|------|------|------|
| 市河寛右 | 市河末龜 | 生方島右 |
| 林鶴梁 | 岡本半助 | 生田菊 |
| 亀田勝為 | 金井烏沙 | 片山通山 |
| 栗原柳庵 | 高山正之 | 傳無紅 |
| 丸橋忠房 | 新井白石 | 町田延陵 |
| | | 橋本香坡 |

余が架中僧無紅の楊本一本あり、今此の由を伝ふ無紅
の青略歴を知ると得たり、こゝに録す

無紅ハ上野勢多郡久田村の修驗を以て仙教院
光旒(本姓野中)字无冕無紅と號す
新傳法大河内梨子、群馬郡下野田村修驗
華花寺の二子とす、後洛の大善院に住す、東
江源齋、臨つて佛法を専ら、法普、唐古法を慕
ひ一家を為す、又漢籍に涉り、光旒在り、の時聖
護院宮をも大取、荒苑の講義を命ぜり、上原
の隆、某家の看取と稱せしむるを、庭田大納
言の宗、用と見し感賞、至尊、千字文を捧

星也しめらん、こゝろもあな遠近に籍き其方風
大り行り、尾州候も就てその、文化六年、
洛東里谷に女中、墓あり

○偶と鷺津宣光、毅書集と讀む、左の一詩を以て

此森春濤法舊賦蛇蟠

放教東西壇垣開、以待者命況天才、而年仕法
其能化、高風庭前、深麦来

往歲大沼子壽、森春濤、是在先君子、
二人嗜詩甚於色、食行止起、臥口不絕、呻吟
之聲、一日回塾者、相集、曝虫於庭中、春
濤看後、復春濤、擬思詩不復、知雨驟至、時
子壽亦吟行、郊外、偏失足於溝中、衣裳曳

泥帶水而帰、回塾、因相、我曰、捨吉、帶水、浩
南、深書、高の春濤、通稱、浩南、子壽、通稱、
捨吉、今、角之、東西、各執、詩壇、之權、

一、自法、七、注、す、讀、已、捧、腹、毅、を、吉、の、松、蔭、に、令、飲、
後、勸、り、松、蔭、に、投、り、ん、と、す、の、ま、あ、り、こゝ、又、毅、
を、の、り、因、つ、て、傳、知、の、所、

余往歲解、近、吉、田、松、蔭、於、江、川、橋、酒、樓、曰、
我、將、遠、行、蓋、其、投、也、船、前、勸、り、也、今、讀、此、
田、顯、大、執、追、懷、松、蔭、詩、感、傷、之、也、哉、此、

自序

記、酒、肆、偶、也、海、氣、昏、煙、霧、重、既、後、
忽、言、吾、去、矣、疾、風、捲、袂、鬢、蓬、鬆、

又抄浦武四郎北海道全圖を刻せし鏡に題する得也

抄浦北海新鏡鶴北海全圖

昔島島鑄出、因西潜藏、子翻其案、鑄鏡
雋陽、漢北見、國維帝所疆、鑄在鏡背、部
落以彰、子實踐、歷甘苦備嘗、詳媿霞客
功過博望、千秋不晦、于四有光

此詩ありし初め武四郎鑄鏡の事長く侍らるを得
ん、詩ハ實事を詠し、こを徒あるべし、一月廿七日

敷本を考へて陸奥の登米縣知事より此鏡渡
され、今を無し、今姓手古名家古前也
年の時、師に敷本の家を出る及故若干

を得、中、登米縣知事より信を乞ひ、時の縁、今
有、此詩今敷本集を後、又登米縣知事
より、此詩の奥を感ず、而して、此詩雪
の一首、雪四の字、況を見、ん、此詩詠し、此詩
き、此詩の、此詩著し、登米友、此詩中、日晴、此詩の、此詩
六、雪四、此詩生る、此詩の、此詩後、此詩の、此詩最、此詩の、此詩

奥中日々雪連天、表於霧霧、細於烟、山庭風
死夜、岑寂、不知、盈積、刻刻、此詩如、日无、此詩透、此詩如、此詩氣、此詩通、此詩
無、此詩声、此詩無、此詩形、此詩入、此詩罅、此詩隙、此詩休、此詩憑、此詩外、此詩帳、此詩圍、此詩敷、此詩重、此詩衣、此詩背、此詩一、此詩半、此詩
斜、此詩抹、此詩白、

敷本を信法に賜て、此詩後、此詩授、此詩く、此詩待、此詩遇、此詩一、此詩二、此詩是、此詩係

紀平沙の如き、徳を云ふ、教を死するを叙
し、平沙の感懐の、次叙し、八律を修む、其の
中六首の注を説き、教中の家史を略叙
するものあり、曰く、曾祖出林府君、監督子平沙
細井の論、漸不念、遂絶意仕途、題帶雪松枝
掛、薜蘿白于、空、篋壁而去、隱居授徒、祖松
隱府君、考益高府君、相继承家子、皆不得志
以致、曾祖以来、藩志を得ざるもの、教を
二列り、世の酬を、を得ざるを云ふべき、歎、教
中の得志、想ふべし。

の二月ホ公坂の五峯、一月、其の借巻を叙す、其の
し、柳湾の持行二冊、和歌集一冊、持卷、此三冊を叙

江波氏の不存、其の未刊を、寸、珍冊子、平考、
架中、四、五、んと、五、峯、話、次、其、一、の、子、を、
井、道、一、中、に、や、ま、き、と、流、る、と、や、ま、け、は、其、一、七、或、る、年、
新、編、に、ま、う、あ、り、家、に、あ、る、高、き、し、と、あ、る、此、人、酒、
癖、あ、る、と、晩、酌、の、後、と、性、之、職、奉、を、掲、り、述、し、
同、行、の、其、の、七、之、九、に、辭、易、し、必、前、と、る、と、
に、托、し、て、房、を、お、し、し、り、あ、る、あ、り、家、か、く、と、香、歌、を、
房、に、侍、ら、せ、し、し、え、ん、と、あ、る、と、職、奉、を、掲、り、
り、と、る、を、著、述、と、此、人、を、あ、せ、し、し、り、の、れ、と、之、人、に、疎、の、れ、
り、と、る、其、一、の、あ、り、に、流、り、を、種、々、の、話、の、由、に、抱、一、の、
畫、次、一、則、あ、り、抱、一、と、其、一、と、毎、日、教、へ、て、あ、る、と、人、
物、を、畫、し、ん、と、あ、る、と、あ、る、と、私、淑、す、し、し、え、ん、と、

あはれぬをききとらむけいせいそくみ給
ひしおちる物と次あまらなむつはくをかし
あまらむせまらむを給いしをとおむつ
くまは涙のさとにほろこふ二十のあつたの月波
の上を流かきまらむいとあつたをさうのむを
りや

かをしを命をうけこしむの女に世を
月をかこらぬあめりぬの浦

と口すまを彼あの手をうちて笑あを又えし
う打ししろきを夢もさめぬさをもあまし
ううつらむととおもふまらぬあつたの浦七
うけつ、いそえらむる 硯をあせこしぬむ

志のりしゆりぬ

柳湾の肖像椿山遺す所也五十年世紙の紙を刻
す時一巻を得たり今遺好文集の首端に巖唐
服を着けたる像を描く椿山の字を柳湾の好
の墓にうけたるものなり此図終氏に今存すもの
同しこれ外椿山草の巻に二ありと覚ゆ又五
十年の家に柳湾自らう鉄を刻して硯一冊を給
す石もこの巻にあり唯此の刻の鉄あり珠とす
べし此鉄文集に載す

硯銘 貝倩需

静而壽、玄而默、文圃光輝、觀於禹德

日本人物語の落失と見えよきもの中川清香の傳中
邪惡教の闖す一川未湯の記あるは元禁正
を多分の多しと今と珍ととて扱へる價十二四
也有る集も支那に於ける絶版也と云隨て價
高く百圓と云と買ひ入れし得る此方と平版を
の多一冊入るを復し曰版式故に價廉これ何
詩物の二つ今と云稀也冬後玉の二河
の甘香も不之ん又稀觀也云 (一月三十日録)

村の者房に世尊寺法帳あり巻尾を換す刻
者も指田某とあり但し延波法具書之と云
り又法興平の印あり延波の篆字勅と云
うらんとも刻あり延波とあることある

指田某未何人なるを知らず前記に延波のものを叙
しつと云つるに云々再記あり

同表に徳富義隆元年刻し狂言集あり
贈り得る前の贈り書寛永版と判題するに
み難本本の福書と云々詩の排列順序も同
いふこと編者の誤と云々内容も底
をとり後尾年者類記に物の名續狂言集
とも取りつとあり此増補を侍妾に關する詩
若干あり一休田と公然妾を四喜と見入る

寄侍妾

遠山何須雪路梯、黄昏月色柳西、暮崖
美妾黄金穴、不及古天白日迷

有妾隨余久矣。一日俄爾辭去。挽之不留。
蓋微香山岳士之揚柳枝者歟。因心三潯
言懷云

離思過。白髮交新。空依倚。外間任人。沈沈夜。
枕臥淚。燈瘦。鰥床一老身。
別後多情。有夢。腸。長春花。厭。當。芳。紅粉。空。窺。
淑。約。君。子。猶。詠。剛。離。詩。一。章。

妾和

一朝分袂淚痕新。此地風流又孰人。初識江山沒
時定。再得。草金。寄。吟。身。

一休之人情。此等之飛。德。及。抗。自。然。之。義。也。德。抱。也。
二。此。事。前。之。陳。心。也。此。等。之。詩。亦。其。一。流。也。之。

と得べき歎

○柳湾、就て追記す、柳湾、八十路の高壽を傑と
り、得し晚年、再、就身し、眼も、不、障を、生し、り
弟、日、查、好、一、柳、湾、漁、唱、百、を、捨、す、ん、一、詩、有、り、此、を
と、詠、り

久患耳鳴、由り又生眼、是、戲、作、一、德

晴、昔、目、邪、用、嗟、悲、親、泣、聽、自、地、掩、毫
年、高、况、無、人、識、耳、裏、瓜、泉、眼、亦、心、花
目、在、誰、一、滴、す、べし、此、道、好、り、辛、丑、以、後、の、心、を、集
あ、即、ち、四、集、後、の、好、唱、と、も、あ、へ、き、也、の、事、四
集、の、好、と、換、し、七、今、何、ん、と、好、事、を、切、り、刊
本、と、弟、三、集、ま、り、り

卷菱湖と同日多即ち西藩名卷より出が、柳湾
と親族也。遺稿中菱湖の遺稿あり一詩あり、
り、友人の交誼を記す。

致遠弟不寄出相賀賦

新年轉元草堂貧何日藍輿出問春
吟罷還憶王錄多逢漫也使杜陵曠
柳湾善讀と微す詩二三あり今左二詩を
録す

題丹波燒木佛圖

一尊燒木笑呵々反冷煙銷又什麼石佛
點以山有謬丹波禪苑老多何
流中一至此と寓す又同じ物と南園上人

和了詩二あり今一を即録す

之子天然手眼新焚燒木佛暖ぬ若若年

錢佛与銅佛 受向新村代來之新

之ん又流中禪味を寓す、柳湾の詩を錢鍊
と注、遺稿あり今一を即録す 二月日記

の偶々上毛偉人傳を讀む、中尾高直の傳あり
此人の傳海に生る上州に死し其を以て其人
の事蹟多く傳ふ、詩多きを以て其傳の傳
話に遺す、此人の事蹟傳ふべきもの
他日文林傳に採録す、と云ふ
高直切名俊即文化九年六月依傳に生る姓を

堀心と云ふ通たまの次男ありて小山氏を感ふ天
資実者慈温厚として慈養の志深し和歌を以て
世に傳ふる切ら英敏者をよくしその勵む十才
一として休後を新の志記と云う結く事と傳ふ衆
皆之を奇とす十五四年の親族某故あり自ら
可見満秩とせし場を伝ふ兄に代り是を以錯す
地氣多しと伝ふ動せり是止法に稱ふ又人
歎賞あり後ち見満秩冤罪を以て獄に下り
高雅之を救えとる方奔走す御堂其の傳
の由切らるる感ふ後満秩の冤分明して免
せらる高雅資性和歌を能くし此篇のよき添
削せらる者多し當りて思ふべきあり傳ふ

行新の仕を辨し養ひ果て家と譲り自ら
高と姓を養ひ江尾本心とあり傳し清和源氏
に就きむら歌を修む時を産根の満之也
才を二高し之れを振くも再三も高雅傳へ
て高とあり後東河に今大江原河に就き益々
歌道を修むあり時

和歌の浦は身をむら歌のいつ中か
此果比らのひららの高をの之を傳

と傳し三條西季心々のゆめく所とあり大
感とありやん

和歌の浦は千代をよばふ田舎の
宮井にさくらもさへけり

二字
二

と御を賜ふ、後漫遊を名し、法名の名を善徳と
孫舟の傳ふ大家を治んとして天保十三年武由川
紙に未り、悔りの名をとりし平治を以て傳の子
申す、指す、在り、其の多し、高直希
る世を歴を歴ひ、甘く、深く、鞠、晦す、或る、
叶、に、定、の、を、

この名の名の定、其の行るを

我、る、よ、の、人、し、

傳し、は、傳、ふ、此、大、ある、高、直、希、の、家、名、を、
に、乘、し、一、人、の、騎、騎、の、者、を、
せ、と、傳、り、家、人、其、の、証、信、を、
之、を、判、し、自、ら、辨、ふ、事、を、

2
家田

其、無、形、心、を、
て、河、波、の、流、に、
と、す、川、波、の、流、に、
を、と、り、七、人、
か、後、人、格、に、
側、に、侍、し、
候、歌、と、以、る、
世、の、中、の、

甲、雪、を、心、

又、あ、り、侍、り、
を、詠、ふ、心、

をか、し、る、よ、の、

かりのふしつて心とめて

と仰みけるに侯威者との死過益と厚ありし
と云其後直克侯のおもと前橋を移する及び其
雅隨後して前橋にあり又侯に従つて江戸の邸に
移り先侯直侯の室錫時を継子と和親を指南
す。これより先井上文雄釋宗玉かおみ千浪の
歌人高橋のれをよき訪の之交を締すといふ
直克侯高橋の才を認め牧民の親に奉け前
橋に移し地を田中町と賜ふ今の位也といふ

我ちと雪の毒根追くして

榛名と宗とぬき方の友

昇進して郡守のとなりし民の海となくある

罪の宣生をゆるすは富之裕強んと平治の女し属吏
心いそぐ権威なきを嘲り而も罪人皆罪を
悦服す潮もあ後と悔り又郡民恒例に依つて
年上罪者の物遣を^{手前}罪人皆^{手前}今方
の病を^{手前}罪人の物遣を^{手前}今方
遺止り郡民治る長くふ一年旱魃して輝馬郡
中あ村おをふるふ藩吏出て、此せんといふ
あ村民を激しうて、高橋終に自ら出法ん
之を流むる村民の服すこれ高橋の夜前
懇到^ト人心を服せしめざる因る後あ村の人
誠して鎮守の祭典を行ふ方り高橋の情を
考へんことをもとめ、高橋ある縁あるあ

花のあひらのあつうの世や

川人共の歌謡の巻をんことを夏原の集巻一巻と
るせんといふの国々許しと許さんつ人る方所の
てじまの、高橋校園の托して著るを取て返さ
か其の湯ぬぬ此し、高橋壯年武をを勵み整
剣に去し又兵者こるすあり狩り家をを多し
花鳥茶防法をささるしゆの二十年六月二
七十六才を以る折く歿後歌集を刻す拖
田原のえんす

夏原の集巻一巻を以る大略を記す
と名原をを著るす
(二月一日記)

○新の詩の巻をんことを夏原の集巻一巻と
るせんといふの国々許しと許さんつ人る方所の
てじまの、高橋校園の托して著るを取て返さ
か其の湯ぬぬ此し、高橋壯年武をを勵み整
剣に去し又兵者こるすあり狩り家をを多し
花鳥茶防法をささるしゆの二十年六月二
七十六才を以る折く歿後歌集を刻す拖
田原のえんす

古館先穂葉集記

我祖後州蒲原郡卷村有古館跡お侍
上杉景元欲奉下士西山某氏所居也天正中
上杉氏移于羽州米澤某亦從而去矣其舊
趾土人開墾作田今仍称館新田有古楨二株
皆数百年物當時以標館門云其一享和申

同人の詩并ニ送る事とある一談味と云ふ事や此一
節余の七物と云ふことと云ふ事の一談味と云ふ事

室君聽雨擬蓋以其室拾受有三人故也其飲酒
煎茶凡上之具皆用細小而取適也主人持小帖
示余云欲請諸名家書畫且欲其去其書畫各
細小精密而為聽雨擬中才一法玩寶重物也
君詩序序此中六欲其至細至小儘亦求之也
余笑云漢少命矣然則至潤也之全亦其細
小中最貴重者矣呂字品乎柳品乎主人
笑而不答

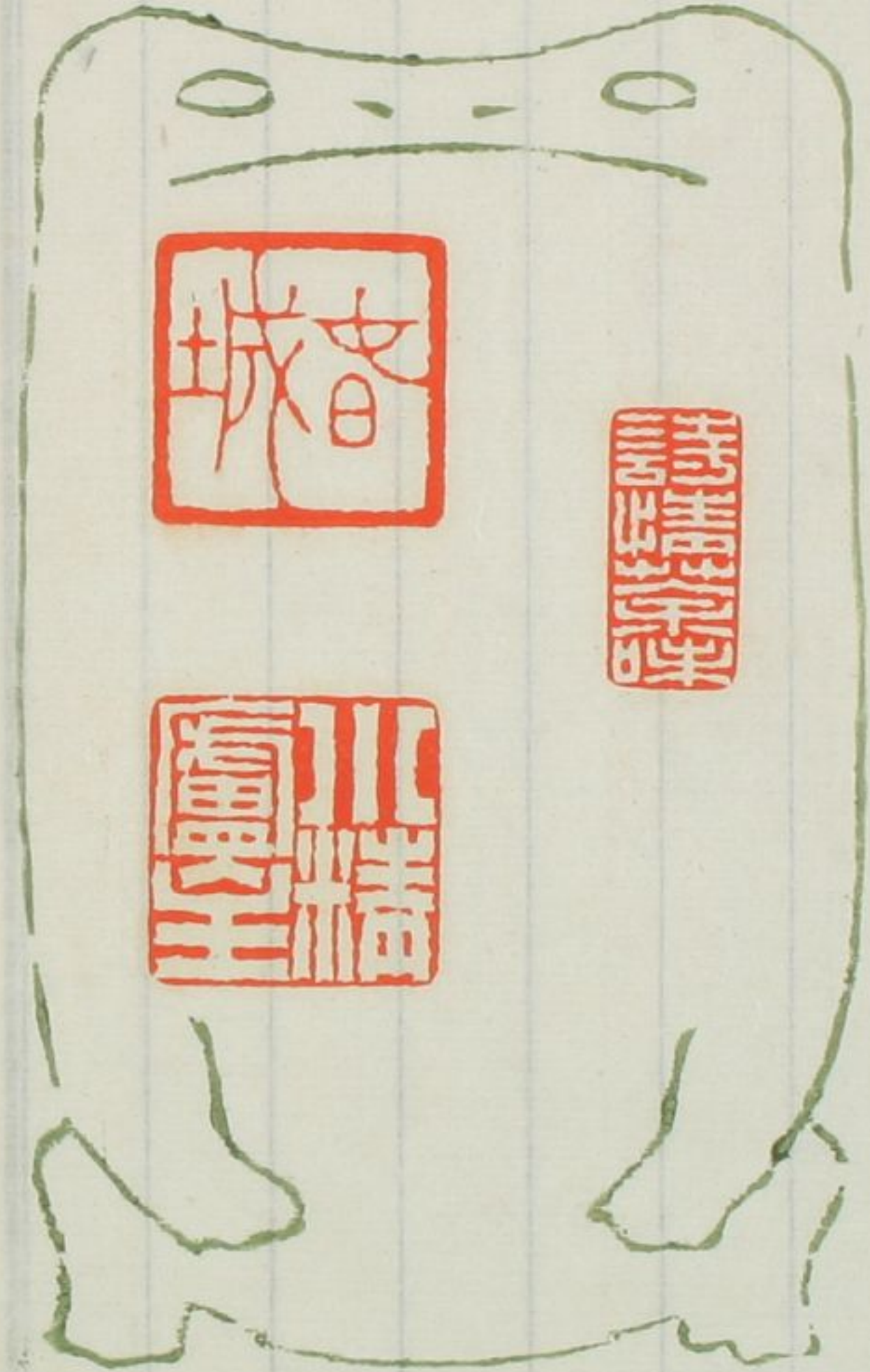
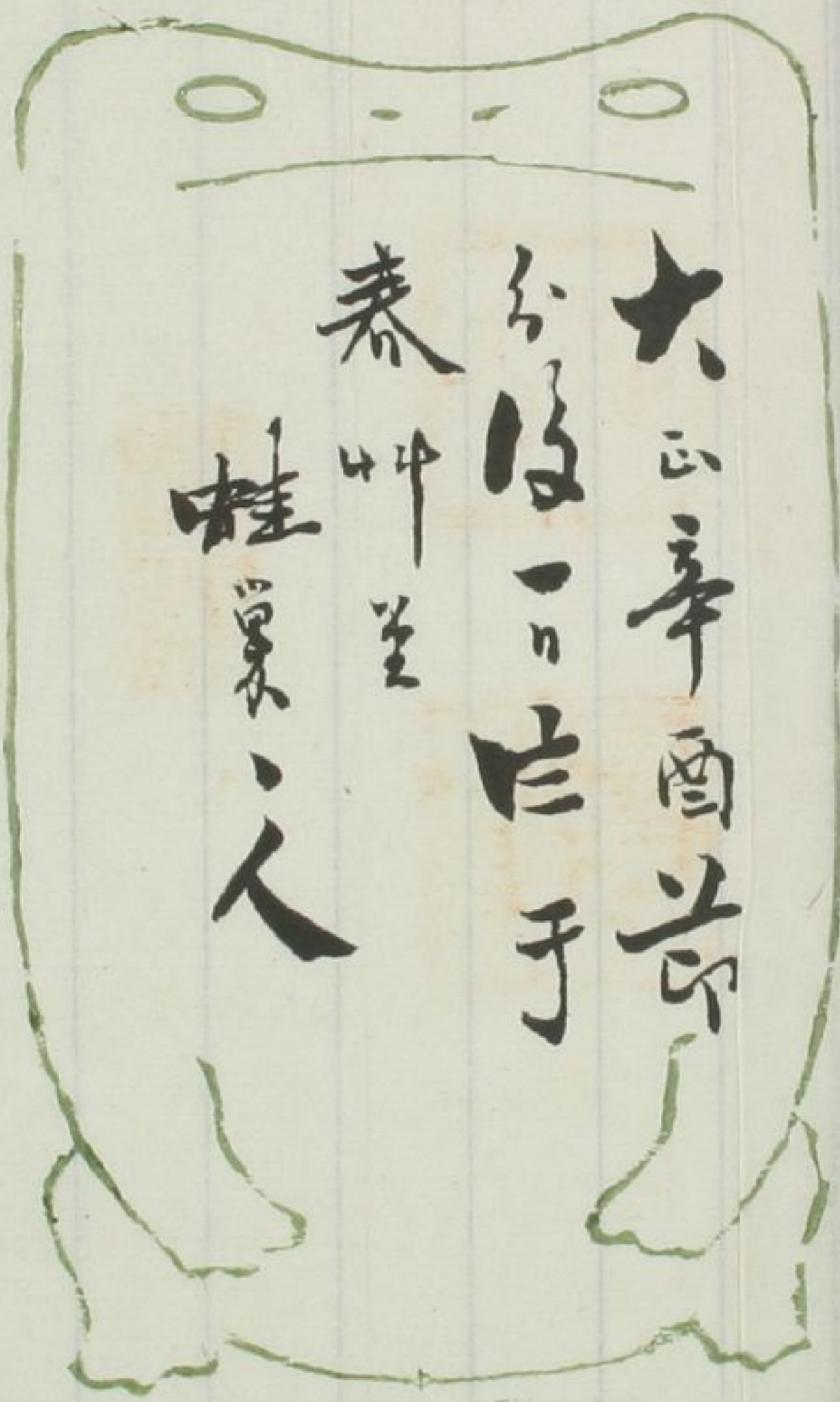
○後中楚果、端しり三顆の印奏刀、朱白共、意に
満つ時、之れを用ゆる可也。楚果の事、前、録しあ
り、こゝに重録せり、今印奏刀を収めおく

二月五日朝記

寶款：就七刀痕を換するに刀の深
骨に達す一見痛快を多し

大正三年酉二月初四日
今製石印三枚
春叶主人 穢野姓集作 錦堂主人

○大隈侯銀像のものと前記せしが右の原形也



米原平雲海の正之と安部流富鑄造すとの外、身
も三尺五寸重三斤十四貫二匁五十分あり、右を
附し、横濱正金銀町の二変金ハセを結果必氏

(大正十二年六月六日記)

○此物終寝て一茶の遺文も後、一茶の句を
論強んと悉し、なんど文章を讀むる如く也、彼人の
文章より枯淡なる例文と一見する可しが、その
旨味ある美文なり人を動するの如き、文集
父終焉の記とあり、其の和元年四月廿三日
を記し、五月廿三日の父の病床、就て日
宿の如くを主細と叙す中、例の祖母や
父母が一茶をありしごまを扱ふこと也、病父が一茶の如

を氣にせし、其の病父が遺文も、病父が遺
文の如く、遺文も、其の病父が遺文も、病父が遺
父が梨栗を欲す、病父が遺文も、病父が遺
うけて終、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
求めんとし、其の病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
也、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
んと欲し、一茶の遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
記も、其の病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
の記といふ、一茶の遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
日比、一茶の遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
傳り、一茶の遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺文も、病父が遺
也

●二月七日記

一層と妻のありの如く三人まゝの子を産みおの
境思一層の悲境をかゝること左の記する
あり

女子と大人と若らひかたき 兼さくん 娘み近づく
んいおぬと 潮魚のまを 取入すまあくま玉の
と見えたりまうして 未世の粒ををや 支那の菊
女といふものを 片葉のあしの 片意地路く
身の覚悟をさるるやせしことを 人の教のんばうハ
の室吹風をさるるやせしことを 人の教のんばうハ
かろふ兒三人とも 遊業の余りうしるいぬこの
夜と三日月のふんば 又前のあつらふる
いと、お便さん 敷衣のまてふふいと一雨

風をへるもあつらふる 母の押しつけ
うかしくも毒せよとせよ 人の石太郎と
ん呼れけり、母もあつらふ、此れいん石太郎
りもこのまをいん、母もあつらふ、此れいん石太郎
る、いと深くいすしめけるを、いん石太郎
せんをいん、母もあつらふ、此れいん石太郎
ひころしめ、あつらふ、母もあつらふ、此れいん石太郎
手のひらめくさう、あつらふ、母もあつらふ、此れいん石太郎
ると思ふ、いと深くいすしめけるを、いん石太郎
印のそあつらふ、あつらふ、母もあつらふ、此れいん石太郎
いにかさる、いと深くいすしめけるを、いん石太郎
あつらふ、いと深くいすしめけるを、いん石太郎

か、又、あきの餅祝ひして居ると思ふ未比納
りのみぢけを

ぬるるをめでし目をつまけ旋美大餅
一七の巻考

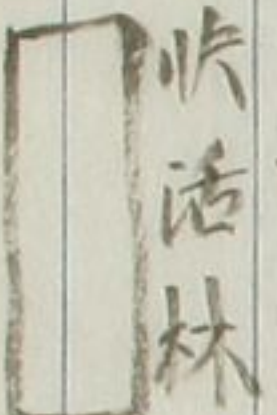
陽炎や目うつときまるとあわら顔
二月十日 井ノ巻一巻

あじろくやかひいやとあ思ひあ
賤も疎さく暮るるるるる

辰片山通山門人

の村の書店に一印謄を購ふ、君山印画と云ふ二冊
を是套也、君山小野島(子釋)首尾の序跋
に見るに、あがたの頃の人也、凡例に、曰く僕有

別傳者東畧禪師傳之望、望洲先生、先生傳之
越溪先生、先生傳之、僕一とあり、其の傳統略々見
入し、此謄初四五巻、右印謄の換刻を掲げ、後
二三巻を會知名の印を載す、此の時代の作家とい
へば、手とてうすを得べし、日本印人傳に此刻
者あり、やゑや、未比換す、是と云ふ、若
く備わらん、補の可也、且らく記して、此刻者
評傳を致へんことを無慮す、二月七日記
○又蛙葉：三款の印刻を漏せんとし、試に印文を撰
む、左の如し



快活林



朱

紅霞 山房 主人



白

金石 禪

三顆中ニ自家の嗜癖を収めんとして此撰あり、快活林
之の許係中ニある語を酒を云ふ、紅霞山房も
印癖を寓する堂猶も、金石禪と重複の姪女
九も、氏名印母を全く缺く能はざるを以て、此
語を撰ぶ、不日五峯、東訪の日、津んも高量し
て定めんことを期す
同上記

〇一九の勝采も一九の心あるも、酒井仲の心を一
九の賞を収めて自家の心として出し、此女と云ふ異説
がある、上も偉人傳中、酒井仲の傳に描き、此も
に載つてある、一九の常々、自心を述ぐること、
仲の書出の由である、又一九、此心は南つた
の、此印の漸就と仲は、絶つた、その漸就は、

してある由を記してある、勿論一九の之れを母と云ふ
するまでも、酒采も、し種々加布り、此女あるも、
仲の存存も、その由、此女あるも、
と仲の心は、撰つたもの、此女あるも、
つと此の仲と云ふ、道楽と云ふ、
生ん、その華由の心と云ふ、
不西、此女、此女、此女、
の、此女、此女、
俳諧、此女、
リ、此女、
撰る、此女、
此女、

その以上、伊勢守忠温の三男である
此の忠温と云ふ人の酒井抱一の叔父である。仲
抱一と従弟の河橋である。仲抱一の性格は
似此所のあるもの偶々いふの仲抱一又畫をよむ
其の菩提寺伊勢守所曰願院と云ふ寺に
ある。仲抱一は、
と守りて放埒の如く宗家姫路侯に預けられ
此のこともある。世帯を憚り比刀根姓を名乗り五
十人位を治中と云ふの勤務を極くす。室高、辰
さん、おむら、藤原さん、此のこともある。終つて死んで出
し、此の方を流浪し吾う獄に投じられたことある
と云ふ、偉人傳の中の一説を載す。

仲抱一花をとお歴し、
家を出た仲抱一、
一と云ふ、
佛壇の楊、
櫻く去ん、
え苦しと、
とありと、
もみ草、
も亦田、
凡人

家身分を問ふ仲筋も迷惑し曖昧の差を
せしむる迄に追窮切らざる仲困迫しと出
奔す

と申し、仲と興あ、流浪中、文部(音具河)作
記某の家、遠ん然の音聲を聞き、そのまゝ
の抱え前赴、世を見さん連れ物入えたることもあ
りとい、梅花の自意はらん

十を今のごとく出しとを物もよごおの

つまくと通ふの梅の香

世の中をたのむるに白紙の

人の方をみる西の月の梅

ちやめのお(お)おの死人のまゝも七果はよまら

天保元年正月廿一日、卒す、曰、聚散は業と
あんとも年、評うらうらう

の上も偉人物、弟の略音の侍あり、其父の子を評
悉す、父も凡人もあつたりし物、上州、是、果
郡、母上、丑、個、お、入、巻、田、本、希、長、通、称、八十次、後
弟、左、ス、門、と、ま、あ、す、の、あ、乃、乃、略、音、の、父、也、此、人、死、軍
将、有、を、制、り、通、唐、と、弟、す、少、時、卓、然、牛、帯、入、身
を、ま、ん、名、を、成、る、ん、こ、と、を、心、と、す、年、二十、江戸、出
じ、物、指、申、職、を、の、む、後、ち、能、あ、流、後、終、京、都、
上、り、妻、を、の、く、寛、文、二、年、十、月、五、日、個、お、悔、り、一、子、を
産、け、し、る、も、略、音、也、通、唐、在、高、知、志、を、決、し、ん、家
業、を、親、属、と、譲、り、僅、う、る、至、り、人、分、二、米、を、高、ら、し、妻、

多しを有と終の抱一其終をゆめし其まに
入り其の故を問ふ之を美を得抱一遂に其人を
門松を心くしめ又解を初く之時居るまに
初めし終を成と祝するを得るまに
心圓のほろり之文亦陳瑞の清なるを考へん
折りの材料より大眼を考へるまに
(二月九日志す)

○前日清の山田君山の君山印画のつぎ日本印人伝(敬
所編)を閲するや傳を載す左の如し

十野君山名ゆゑ字子粹、君山其号、一號蓮
花道人、晚難於友稱其号、江戸人、其業北

片山由山、其書、其号の家刻、号于山世号、
又其書、其法甚重三橋、徐北行、大有所得
所著有古今印典、古印編、君山印画、

備考、山世号、其紙、其号、其刻
其於柳原、其号、遂得東泉越師
刀法、

○二月九日 例し如く書肆を訪ふに金名二種を得

西冷印社致花

二健金堂印譜

元趙樞叔の印譜也余此年訪の
印譜二種を得て觀閱す其志

卷を料く能うか今又之れを獲、無
聊中一の大事也。序文：微言
二集八冊とあり、今の獲は二の
四冊也。知る者傳：ある四冊あり也

随軒金石文十冊

上海徐渭仁雙鈎上梓する所坊間
多く此方あり也。新版多し、今の
得るもの同光初版：庶幾し

〇柏如身の詩集と得、僅に二冊と一冊とあり也
也。山亭禮の詩人其の刻する所の詩のふるき宮平ら
奇とすし。卷首浪義の詩あり、序あり

如身の自家の詩の刻者あり、八其の詩の多の
えんことを望む、然るに其の少、えんを望むと
あり

自己卯至丙寅凡十二年所得詩千餘首、又
刪其不中繩墨者得一百首云、余曰、其矣
山人之刻者也、既刻之、于其子、又刻之、
于其孫、今又重刻之、于其孫、詩人
刻一集、唯惠其不多、山人則唯如惠其石の
山人曰、傳詩何必在多、崔司勳以黃鶴樓一首
蓋一代三百年、韓愈人以青烟散入五侯家、一
句飛名于九重上、且吾所喜詩皆批糖、唐
增也、所存詩骨髓精神也、自今以往得一首

余再搗城其石生叙舊于山風川上一夜生
悠逋復游新石余畏海岸風雪陰決
意東歸途中偶思及因作新石圖
更系以詩寄之

六街三市起芳塵路柳墻花二新此境于今
猶入夢時迤七十四橋春

續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春

續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春

續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春
續入夢時迤七十四橋春

全上記

無用之用

金石
圖書

紅霞
山房
主人

賣地添書

杜荀鶴詩、賣地添書、
賣地、添書、字下、一床、也、

緘音秘異

呂溫詩、緘音秘異、
字卷、也、

吟披瀟卷

全上、吟披瀟卷、
字、也、

書連心

杜甫句、
書連心、
字、也、

花土相若

孟郊句、
花土相若、
字、也、

剡田買主

元史、
剡田、
字、也、

舒被覆書

盧蘇少、
舒被覆書、
字、也、

積聚篇卷

向朗、
積聚篇卷、
字、也、

疏命陸巢、
印三、
刻、
字、也、

五峯一とていふ中一あり。然るを名道と名ふ
可し。仍て湯のふり印修と撰ひ托す二月十二日
也

六
多
制
衣

12
國
田
製

和歌山県
紀伊郡
新宮市
新宮製本
昭和二十一年

12
田舎

